

第三章 実業之日本社の拡充期 1908～1912年

『実業之日本』は1897年の創刊から着実な発展を遂げ、10年目の1907年には、その発行部数が創刊時の20倍以上となり、全国の雑誌の中でもダントツの一位を占めるに至ったが、その後も順調な発展を続けていった。

明治末期から大正にかけてのこの時期、『実業之日本』は政治・経済などの時事的な問題を取り上げただけでなく、雇用や職業選択などにまつわる人びとの生き方や価値観など、いわゆる人生案内的性格を帯びた記事をも掲載することにより、読者層を広げていった。それは同誌の変化をも語っており、そこに過渡的色彩を見ることが出来る。

また実業之日本社は、日露戦争後に、『婦人世界』『日本少年』を発刊するが、いずれも創刊1年余りで、同種雑誌の中でトップの売り上げを誇るようになった。当時の雑誌界は、かなり活発であった反面、一方では創刊まもなく廃刊の憂き目にあうものも少なくなかったが、そうした中であって、この時期の実業之日本社の雑誌の好調ぶりには、目を見張るものがある。それは同社が激しく変り行く時代状況の中で、人びとの知的欲求に的確に応え、思潮の流れにうまく乗ることによって、もたらされたものであったと言える。

同社は、これら雑誌のほかにも、100種以上の書籍類をも刊行している。日露戦争後から大正にかけてのこの時期は同社の拡充期と言えるであろう。

本章では、この時期の実業之日本社の営業の発展ぶりを追うとともに、『実業之日本』の論調にあり方を中心に見ていくが、最後に1912年に増田義一が衆議院議員になったことと2年後に辞任することについてふれておくことにする。

第1節 『少女の友』の創刊

この時期の実業之日本社の営業のあり方を見る上で、まず少女雑誌『少女の友』についても触れておくことは重要であろう。

『少女の友』(月刊)は、1908年2月11日、紀元節を期して創刊された。版型はA5判、厚さは104ページで、定価は10銭である。それ以前の少女向け雑誌としては、『少女界』(金港堂発行、1902年2月創刊)、『少女世界』(博文館発行、1906年9月創刊)の二誌があった。しかし、先行の『少女界』の売行きは芳しくなく、苦戦を強いられていた。それに対して後発の『少女世界』は、博文館が『少年世界』の編集で培った経験を踏まえて出したものであり、すでに5万部を超える勢いを誇っていた。そのような中で、実業之日本社は、『少女の友』を創刊するのである。『少

『少女世界』をライバル誌として念頭に置いたことは間違いない。博文館の『少年世界』に対抗して同社が出した『日本少年』が成功したことから、二匹目のどじょうを狙ったものとも言える。

とは言え、博文館の『少女世界』は、堅実な歩みを重ねてきて、すでに多数の固定読者を擁していたことから、その牙城に迫るのはけっして容易なことではなかったはずである。しかし、『少女の友』は、またたく間にそれに肩を並べるようになり、両誌はその後、互いに競い合いながら、少女たちに大きな影響力をもつようになるのである。以下、『少女の友』の「成功」のプロセスを見ておこう。

『少女の友』がめざすところは、その「発刊の辞」¹に如実に表れている。

『少女の友』発刊の辞

少女の時代ほど可愛らしくもあり、また恐ろしきものはありません。如何なる色にでもすぐに染まり易く、また一たび悪習慣は容易に直すことが出来ません。それが為、いつしか悪い友達と交つて悪い習慣を作り、親の言ふ事を聴かず、先生の教にも従はず、他人に嫌はれ笑はれるやうな娘になつて、遂に一生を過つ者が少なくありません。

此悪い習慣を防ぐには学校と家庭との外に、少女に取りて面白く有益な読み物が最も必要であります。然るに、かやうな良い読み物はまだ我国にはありません。依て我社は最良の婦人雑誌『婦人世界』の妹雑誌として、少女の為に、面白く、且有益なる『少女の友』を発行するに至りました。此「友」こそ実に我が少女を導いて、やさしく、うるはしく、人に敬愛せらるる婦人となるに無二の師友であると信じます。

『少女の友』を『婦人世界』の妹誌と位置づけたことは、ここからも明らかである。すなわち、『少女の友』は、「よき妻」「賢い母」の予備軍をつくるための雑誌であったのである。

主筆は、兵役を終えて復社した『日本少年』の初代主筆星野水裏である。星野は編集者として独自の信念を有していた。たとえば、表紙絵を担当した川端竜子に対し、絵の中の人物は華美な服装を避け、着衣は銘仙までというような細かい注文を出した。また、本文の小説その他の原稿についても厳密な注意を払い、内容はもちろん、表現や字句に至るまで、不適切と思えば改めさせた。たとえば、本文中に「妾」「芸者」「継母」「尻」などの文字を使用することを禁じたのである²。

¹ 「発刊の辞」(『少女の友』第1号、1908年2月11日、前掲・『実業之日本社百年史』所収。p.49～50)。

² 渋谷青花『大正の「日本少年」と「少女の友」——編集の思い出』(千人社、1981年) p.26～27。

さて、創刊号の目次をみると、「閑院宮女王恭子殿下」「徳川公爵令嬢」など、皇族、華族の令嬢の写真口絵のほか、村井弦斎の「優しき少女が友人を善人に化した話」、高信峽水の「光ちゃんの人形」、星野水裏の「子煩悩の動物」、渡辺白水の「若松城」、滝沢素水の「小鳥」、長谷部湘南の「春寒」などの読み物や、川端竜子、竹久夢二の挿絵というように、『婦人世界』『日本少年』の常連執筆者・画家の作品が並んでいる。

巻頭は表裏別色の二色刷りを採用し、写真銅版による挿絵を多く挿入したことは、いっそう同誌のイメージを鮮明にした。画家の中で、早くから読者に歓迎されたのは竹久夢二であった。夢二は独自の画風を持ち、異色とも言える筆致を用いて、少女の姿態を素朴で艶っぽく描く独特の妙を発揮した。彼の少女好みの文章にも、驚くべき天才ぶりを垣間見ることができる。

また、笠井鳳斎の考案による懸賞画探しの新しい企画は、読者の興味を大いに喚起した。しかも解答者の発表は、従来他の雑誌とは異なり、同一地方の解答者を一か所に集め、県別に配列し、住所・姓名・年齢などを詳細に明示し、かつ応募総数を詳記するといった具合であった。これらは、編集者の周到なる工夫の結果であり、経営者の存意がのぞかれる部分でもある。

『少女の友』はたちまちのうちに読者の好評を得ることになった。この雑誌には、実に有益なことが多いので、家庭教育に非常に役立ったというような内容の礼状が、数多く寄せられた。こうした状況のもとで、『実業之日本』(第11巻第5号、1908年3月1日)も、誌上に「江湖の深厚なる同情を感謝す」という一文を掲載しているが、そこでは「表紙艶麗、口絵優美、写真満載、紙質純精、記事は面白くして且實際為になる有益な話」など『少女の友』の特徴が強調されている。

しかし、残念なことに、発刊当初の『少女の友』の発行部数を知りうる資史料はない。

第2節 新渡戸稲造の編集顧問就任

(1) 新渡戸稲造と実業之日本社

さて、この期の実業之日本社について語る場合、新渡戸稲造の同社へのかかわりについては、どうしても言及しておく必要がある。

新渡戸稲造は、1862(文久2)年、盛岡の南部藩士・新渡戸十次郎の末子として生まれた。祖父の伝は同藩三本木地方の開墾に貢献した功臣であった。1877年、新渡戸は札幌農学校の第二期生として入学した。同校初代校長クラーク博士はすでに帰米していたが、第一期生を通じて、その人格の余薫に触れた新渡戸は、内村鑑三・宮部金吾らとともにキリスト教に入信した。キリスト教の信仰は生涯にわたって彼の

人格の支柱となる。特に後年、アメリカ留学中にフレンド派の信仰に帰して以来、同派の日本伝道にも重要な役割を果たすことになる。

札幌農学校を卒業した後、1883年東京大学文学部に入学した。しかし、東京大学の学問のレベルの低さに失望して、アメリカに渡るのである。1887年に帰国して札幌農学校の助教授に任命されたが、同年10月にさらにドイツに留学し、ボン、ベルリン、ハレで学んでドクトル・デア・フィロゾロフィの学位を得た新渡戸は、帰国後、28歳で札幌農学校教授となる。しかし1897年10月、病気のために辞職を余儀なくされた。そして1900年再度渡米するが、間もなく台湾総督府の要請を受けて1901年台湾に渡り、製糖業の革新に大きく寄与することになる。英文の著書『武士道』(*Bushido, the Soul of Japan*, 1899年)は、当時のアメリカ大統領セオドア・ルーズヴェルトが刊行早々にこれを読んで、60部を購入して友人に贈ったといわれるが、日本および日本人を知る上での必読の書として、いまなお欧米で読まれている。なお、後年のことであるが、新渡戸は、国際連盟創設初期の7年間(1920~26年)、事務局次長として活躍したことはよく知られている³。

さて、1906年、第一高等学校の校長(東京帝国大学講師も兼任)に就任した新渡戸は、キリスト教に基づいた理想主義を掲げて、学生の教育に当たった。新渡戸は、紳士であること、誠実であること、愛情の大切なこと、そして国際的な視野の必要なことを、未来のエリートたちに説いた。

しかし、当時の新渡戸は、卓越した教育者であると同時に、何よりも優れた農学者であった。『実業之日本』への最初の寄稿は、「欧米農業の大勢」(第4巻第4号, 1901年2月15日)であり、その次は「立国の基礎——商工主義と農本主義」(第6巻第3号, 1903年2月1日)である。この2つの文章は農政学者として執筆したものである。また、彼はすでに、1897年に札幌農学校教授・農学ドクトルの肩書で、大日本実業学会が出していた講義録「高等農家」を『農業発達史』として実業之日本社から出していた。これが新渡戸と実業之日本社との最初のかかわりである。

新渡戸が『実業之日本』の読者、すなわち非エリートの読者に向けて、初めて修養について語ったのは、「修養上に於ける余の実験」(第11巻第2号, 1908年1月15日)である。もっともこの記事は、記者が新渡戸に質問したものをまとめたもので、「之を世に公にするは博士の志にあらざるも(中略)特に乞ふて爰に掲ぐ」という囲みの文章のあることから考えると、自分の所説を『実業之日本』に掲載するのは、新渡戸の本意ではなかったものと考えられる。

だが、第2稿として「新時代に処する実業家の武士道」(第11巻第11号, 5月15

³ 石井満『新渡戸稲造伝』(大空社, 1992年)。巻末「新渡戸稲造博士略年表」参照。

日)を執筆すると、第11巻第14号(7月1日)からは毎号原稿を寄稿することになる。つまり「如何にして世を渡るべきか」(同号)、「如何なる方法にて煩悶を解くべきか」(第11巻第15号,7月15日)、「青年の墮落は如何に防ぐべきか」(第11巻第16号,8月1日)、「後藤男は故児玉大将に比して如何に優劣あるか」(第11巻第17号,8月15日)と続き、さらにそれ以降も、彼の文章は同誌の誌面を飾ることになる。

第一高等学校校長としての新渡戸は、エリートを相手にした教育者であったが、『実業之日本』の読者に対しての場合には、非エリートを相手にした教育者としての立場を貫いた。しかしながら、東京帝国大学講師であり、第一高等学校校長である新渡戸が「通俗雑誌」に執筆することについては、各方面から強い批判の声が起こった。たとえば東京帝国大学教授であり、日本の政治学者第一号と言われる小野塚喜平次は、その急先鋒であった。吉野作造などの友人も、新渡戸のために憂慮して、『実業之日本』の寄稿をやめるように懇請した。さらに、彼の門下生の間からも反対の声が起こった。その一人東郷実⁴は、新渡戸が『実業之日本』に執筆することに対して次のように異を唱えている。

先生は最近『実業之日本』にお書きになつていますが、あれはお止めになつては如何ですか。先生のような学者がああゆう大衆雑誌にお書きになるということは学校出たての純真な青年から見ると面白くありません。学者は学者らしく専門の雑誌に筆を執るべきだと思います。聞くところによると『実業之日本』は先生の文章により近來すこぶる評判がよくなつたということですが、ああいう雑誌には必ず商売敵というものがあります。従つて評判がよくなればなるほど一面には商売敵を刺激するばかりでなく、遂には先生を非難し、人身攻撃も敢て辞せないものが出て来ることは間違いないと考えます。⁵

それに対して、新渡戸は次のように答えている。

日本の現状に鑑み、最も大切なことは大衆教育だ。学校教育を受けることの機会を持ち得ない多くの勤労働者達に出来るだけ必要な社会教育をほどこすことが、今日焦眉の急務なるを思うとき、自分はこの目的達成のためにはどんな犠牲をも払う決心だ。聞けば砲兵工廠辺の工員達が一番多く読んでいる雑誌は『実業之日本』だということだ。故にあの雑誌を通して、これら勤労働大衆を教育することは最も効果的だと考える。これ自分

⁴ 農学博士。のち文部政務次官となる。

⁵ 東郷実「増田先輩と新渡戸先生」(前掲・梅山紘編『増田義一追懐録』) p.189~190。

が増田社長の要望に応じて同誌に執筆する決心をした第一の理由である。

尚自分は学者でも何でも無い。自分の書いたものが学問的生命を保ち得るのは長くて今後五十年位のものだろう。それから日本では人の評判のよいのは長続きはしない。日本人は人をもりたてて益々その大を為さしめようと努力するよりは、寧ろ評判のよくなった人を何とかして引きずり落して葬り去らんとするのが一般のゆき方だ。今君のいうように『実業之日本』が最近好評で売れゆきもよくなつて来たことに対して自分の執筆も多少は役立つと信ずる。いろいろの方面から『新渡戸たたき落し』にかかるものも早晚出て来るにきまつているが、国家社会のため必要な大衆教育の徹底を期するためには、新渡戸はどんな犠牲でも払う覚悟でかかっているから、世の非難攻撃などは少しでも意に介しないつもりだ。自分は増田君が他に率先して斯くの如き企画を敢てしたことに対し多大の敬意を表すると共に、飽くまで同君の事業を援助し、その志を達成せしむることに肚をきめている。⁶

これを聞いて、東郷実⁶は反対論を撤回したという。のち彼は追憶の中で、「新渡戸先生のこの抱負と覚悟とに対して心からなる尊敬の念を禁じ得なかったのであるが、それよりも増田社長が、当時顧みられなかった勤労大衆の教育と善導とに深き関心を払い、この国家的緊要事遂行の一手段として新渡戸先生をキャッチしたその達見と賢明さ^{ママ}とに対し、私は多大の敬意を表せざるを得なかった⁷」と述べている。さらに、増田と新渡戸との関係については、「文楽座に於ける人形と人形使の関係」にたとえて、新渡戸は人形であり、増田は人形遣いであったと述べている。しかも、増田は、文五郎以上の腕前を持った当代希にみる偉大な人形遣いであったとも付け加えている。

誌面には、名もないような小工商の店員、工員、あるいは女中といった人びとが、新渡戸に手紙をよせて表情を訴え、人生の指針を仰ごうとした文章が載っている。それに対して新渡戸は、誠実に相手となり、彼らの訴えに耳を傾けたのである。

(2) 新渡戸稲造の編集顧問就任

1908年、増田は新渡戸に、実業之日本社の編集顧問に就任して欲しいと申し出た。その内容を詳しく聞くために、新渡戸は増田を自宅に招いた。二人は直接会っていろいろと話をしたが、増田は「出版方針のもととなっている会社の哲学と雑誌の持つ使命」について説明し、「産業界にいる若者の精神面の指導の重要性」を強調した。

⁶ 前掲・東郷実「増田先輩と新渡戸先生」p.190。

⁷ 同上。p.191～192。

そして、日本中の青年の尊敬の的となっている新渡戸こそが、それに大きく貢献できる人であり、「あなたをおいて他に適当な人物はいない」と述べた⁸。

新渡戸は、道徳観を養うことが肝要であるという増田の考えには同感であった。しかし、彼が増田にひかれたのにはもう一つ理由があった。新渡戸が特に評価したのは、増田が日本の将来のためになることを真剣に考えていることであった。つまり、増田はどのような階級に属する若者であっても、彼らが人生の目標を見出し、社会の良き担い手となるように手助けし、それによって、将来、強力な国家を作り上げることができると考えていたことに対してである。当時の日本はそれなりに発展をしていたが、まだまだ西洋諸国には力の及ばない国であり、わずかずつでも個人が国家に貢献できるようになれば国力は充実するという信念を増田はもっていた。新渡戸はそのような増田の信念とその努力を信頼したのである。

しかし、『実業之日本』の場合、教育と商業主義の区別があまりはっきりしていなかったことから、第一高等学校の校長である新渡戸が一般大衆向けの雑誌に執筆することには、さまざまな方面から批判を受けることが避けられないという予測もあった。しかし、新渡戸は自分が格段の説得力を持ち、若者を感化することに長けていることを十分自覚していたので、この流行雑誌を通して広く影響を及ぼしたいと願った。彼はその年、つまり 1908 年 12 月に増田の申し出を受け入れた⁹。

このようにして、新渡戸は『実業之日本』の編集に加わり、それ以降 10 年余りにわたって、編集にかかわることになったのである¹⁰。新渡戸の就任の重大な意義について、増田は次のように語った。

博士の新活動が我雑誌界破天荒の一大現象たるべきは最早吾人の予告するを要せざる所なり。聞くが如くんば、米大統領ルーズベルト氏は、今春元首の重職を後継者に譲ると同時に、雑誌アウトルックの招聘に応じて同誌上に新活動を試むるに決し、既に知人に向て之を宣言したりといふ。誠に米国雑誌界空前の壮挙といはざるべからず。而して我国に於ては恰かも時を同じく新渡戸博士が我社の顧問として起たれたるあり。博士の位置、学問、思想、才藻等は夙に海を越えて世界に宣伝する所、誰れか此挙を以て我国雑誌界空前の壮挙とするに躊躇する者あらんや。吾人は博士と我社との新関係を以て

⁸ 新渡戸稲造「余は何故実業之日本社の編輯顧問となりたるか」(第 12 巻第 1 号, 1909 年 1 月 1 日)。

⁹ 以上の経過については、ジョージ・オーシロ『新渡戸稲造——国際主義の開拓者』(中央大学出版部, 1992 年) p.119~121。

¹⁰ 新渡戸は 1921 年まで『実業之日本』の編集に関わっており、また晩年には増田義一から経済的な援助を受けていたことも明らかである。これについては、山崎安雄『著者と出版社 第二』(学風書院, 1955 年) p.129~143 に詳しい。

ルーズベルト氏のアウトルックに対する新関係と東西相照映して世界に於ける雑誌界の二大偉観といふに決して過言にあらざるを信じ、国家の為に之を喜び併せて我雑誌界の為に之を祝す。¹¹

新渡戸は間もなく、「余は何故実業之日本社の編輯顧問になりたるか」(第12巻第1号, 1909年1月1日)を載せ、自己の信念を表明した。これは、当時を代表する知識人が、『実業之日本』をどのように見ているかということを知る上では、かなり興味ある文章である。その内容を要約すれば次のようなものである。

第一に、中学を中途退学したり、または中学の教育さえ受けられなかった人びとを教育し、その観念を改めさせることは今日最も必要なことである。『実業之日本』はすでに久しく社会的教育を行うことをもって任じており、発行部数8万部、読者24万人を擁しているのです。その影響力は大きい。この雑誌を通じて学問のない人に学問を与え、煩悶している人に慰安を与えたい。

第二に、高尚な議論はいかに立派なものでも、そのままでは一般の人には通じない。したがって、卑近なことで何人の目にも入りやすいことを説き、そしてその中で高尚な原理から応用されたことを説くということはたいへん必要なことである。『実業之日本』は高尚なことを、そのまま述べるのではなく、誰にでも解りやすく説いている。そして、皆が知らなければならないことを説いているのである。

第三に、『実業之日本』の読者の性質から見れば、知識の程度は別として、真面目である。『実業之日本』は読者が多いというが、ただ、多いということだけではなく、なおこういう人がいるということは感動的である。熱烈なる読者の雑誌に対する関係は、普通にいうところの師友以上の関係である。

第四に、『実業之日本』は実業に従事する人に必要なことを説いて国家の富を増すことにつとめている。日本が外国に対して多大の負債を有する今日、実業家の修養を説いて、国富の増進につとめている同誌が、日本の実業の健全な発達に寄与することを切望するものである。

第五に、新聞雑誌に対する自分の観念は増田義一社長と同一である。社長は「我々は平生雑誌を編輯するに自己の利益は念^{ママ}はないで、読者の利益となると思うことは如何なることでも断じてこれを行い、そして個人の幸福、社会の発達に貢献することを期している」と公言されているが、それは同感するところである。

¹¹ 増田義一「我社の編輯顧問として新渡戸博士を迎ふるの辞」(第12巻第1号, 1909年1月1日)。

第六に、新渡戸本人も青年時代に今の多数の青年と同様に煩悶に陥った時代があった。しかし、幸いにして善良な友人があり、感化を受けて、キリスト教の信仰を得たので、煩悶を脱することが出来たという。若い人たちの苦悶をやわらげることはきわめて重要なことだと考える。

以上のようなことを書いた後で、新渡戸は、今回顧問として就任し、誌上で多数の青年に接近しその見解を述べる機会を得られることは、自身の経験に照らして深く愉快とすると記している。

注意すべきことは、新渡戸が「金銭が目的ではない」と明言しているところである。彼は理想主義と利他主義の観点から、商業雑誌に筆を執る決心をしたのである。新渡戸は、この雑誌の読者の多さを利用することにより、青年に影響を及ぼし、彼らが煩悶に陥り、犯罪を犯したり、あるいは社会主義者になることを防止したいのであると説明している。

以上のような理由に基づいて、彼は一高校長という知的世界から外に飛び出した。かくして、新渡戸は、煩悶と社会主義の両者に対抗する伝道者となったのである¹²。

(3) 『実業之日本』における新渡戸稲造の「伝道」

「伝道」という表現は、新渡戸にはふさわしいものであった。なぜなら彼は、みずから「武士道」¹³を称賛し、かつ軍事的手段による日本の拡張主義を支持していたとはいえ、やはりクリスチャンであり、クエーカー教徒であったからである。そして、社会主義や共産主義に対抗するために、キリスト教から「貧者は絶えず世にある」といった一文を引用していたし、忍耐や努力といった徳目を例示するために、キリスト教的な事跡を利用していたのである¹⁴。とくに「修養」に関することがらは、彼の『実業之日本』の文章の大半を占める主題であった。ただし彼によれば、「修養」とは、現状を変革することなしに、個人の不満を解消させ、幸福に導くことを意味した。たとえば、実業之日本社から出した『修養』(1911年)では、次のように説く。

僕が茲に修養法を説くに当つても、我々が平凡なる日々の務を尽すに、必要な心掛を述べるを目的とするので、一躍して英雄豪傑の振舞をなし、六ヶしい事、世の喝采を受ける事を目的とせぬ。功名富貴は修養の目的とすべきものでない、自ら省みて屑とし、如何に貧乏しても、心の中には満足し、如何に誹謗を受けても、自ら楽しみ、如何に逆

¹² 前掲・E.H.キンモンズ『立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ』p.231～232。

¹³ 新渡戸稲造「新時代に処する実業家の武士道」(第11巻第11号, 1908年5月15日)。

¹⁴ 新渡戸稲造「世渡りの道」(『新渡戸稲造全集』第八巻, 教文館, 1970年) p.367。彼の全集の八、九、十巻に集録されているものは、当初『実業之日本』に発表された。

境に陥つても、其中に幸福を感じ、感謝の念を以て世を渡らうとする。これが、僕の茲に説かんとする修養法の目的である。¹⁵

一見消極的な主張に過ぎないように見えるが、この『修養』は、それが出版された1911年から1929年までの間に140刷を数え、約25万部が出版されたという¹⁶。なぜそれほどに読まれたのかといえ、彼の文章は読み易く、話し言葉風のスタイルであり、したがって義務教育しか受けていない者でも容易に理解できたというのが大きな要因であったことは間違いない。さらに、彼の主張が、江戸時代の通俗道徳と類似していた点も人気の理由のひとつであり、そうした親しみやすさが読者にアピールしたものである。たとえば新渡戸は、逆境にどう対応するかということをお教えただけでなく、読者たちが毎日実践している忍耐というものを、この上ない美徳だと高く評価していたのである。

新渡戸は、友人の佐伯理一郎に出した1909年6月28日の手紙の中で、次のように述べている。

僕が実業の日本に関係せるは果たして如何なる動機なりしかは僕の身辺を知る者はよく理解す、アア君、未知未見の人びとより謝辞、感謝の言を得れば自ら理解すべし。山深き寒村の少女、都会の最中に迷う男子等が一人二人二十人僕の拙論を読んで失望の間に氣をとり直し、罪の生涯をやめて光明に赴き、前非を悔ゆる等の書面を送りて呉る。すれば「新聞屋の悪口杯は何んの苦痛も僕に与えぬ」と唯々神に感謝するよりは外ない。実際今朝も「羽前、若き妻」よりの一書、昨夕「熊本県下の某」より壺通杯、僕にとりては誠に感謝の種子なり。¹⁷

この友人への私信からも窺えるように、新渡戸は自分に向けられる批判をまったく意に介せず、『実業之日本』への執筆を心から楽しみにしていたのである。

その後の4年間、新渡戸は第一高等学校校長の職務の傍ら実業之日本社の編集顧問の仕事の続け、記事を書き続けた。これらの記事は当初から大きな反響を呼んだ。読者は日常的問題に対する新渡戸の思慮深い助言をむさぼるように読んだようである。それにより、『実業之日本』の売れ行きは、当然ながら急上昇した。

『実業之日本』は、新渡戸の編集顧問就任発表の翌号（第12巻第2号、1909年1月15日）に、「名士は新渡戸博士と我社の新関係を如何に見たるか」を掲載した。

¹⁵ 新渡戸稲造『修養』（実業之日本社、1911年）p.16。

¹⁶ 前掲・『新渡戸稲造全集』第七巻、p.691。

¹⁷ 東京女子大学新渡部稲造研究会編『新渡戸稲造研究』（春秋社、1969年）p.206。

前文部次官の沢柳政太郎は、新渡戸を得たのは「天下の名士を網羅」するに等しいと称賛し¹⁸、早稲田大学学長の高田早苗は、『実業之日本』は新渡戸を得て「大なる光彩を添ゆ」るのみならず、「新時代に適應する新人格を建造する」主義を新渡戸の助力によって「益々現実とならん」と祝賀した¹⁹。また、東北帝国大学教授心得の佐藤昌介は、経済性と道德性の両方を備えた「新人格を修養する」ことをめざす実業之日本社が行ったこの壮挙に対して満腔の賛意を表すると述べた²⁰。さらに、徳富蘇峰は新渡戸を「天下の逸品」と褒め、第一高校学校校長の現職を辞し全身を実業之日本社に投じることが望ましいとすら提言した²¹。政治学者であり早稲田大学教授の浮田和民は、西洋社会の根本たるキリスト教の精神を充分理解している新渡戸が、日本の武士道の欠点をうまく補い調和させて世界的武士道とし、それを実業社会に注入し得て欲しいという希望を述べるとともに、それには新渡戸がもっともな適任者であると称賛した²²。このほか前大蔵大臣の阪谷芳郎、新渡戸の編集顧問への就任に祝賀の手紙を寄せている。

新聞界においても新渡戸の顧問就任については多々報道された。『時事新報』『報知新聞』『万朝報』『読売新聞』『国民新聞』『東京日々新聞』『日本新聞』『中央新聞』『都新聞』『毎日電報』『やまと新聞』などをはじめ、全国の多くの新聞がこの件に注目して取り上げたということである²³。

第3節 実業之日本社の文化・社会事業

(1) 全国小学校児童成績品展覧会の開催

1912年、実業之日本社は創業十五周年を迎えた。同社は、『日本少年』『少女の友』などの発行元として、かねてから児童教育に力を尽くしてきたところから、十五周年の記念事業として、これまで開いていた園遊会をとりやめ、「全国小学校児童成績品展覧会」を開催することにした。

『少女の友』1912年4月号の広告には、次のような内容の文章が掲載されている。すなわち、児童作品の展覧会が、少年少女の学業進歩に利するところが多いということは、あえて言う必要もないことである。そして、日本全国小学校児童の作品を一堂に陳列してみたいという考えは、教育家にしても父兄にしても、万人の希望す

¹⁸ 沢柳政太郎「一新渡戸博士を得しは天下の名士を網羅し其名前を賛成員として掲ぐよりも満足」(第12巻第2号, 1909年1月15日)。

¹⁹ 高田早苗『実業之日本』の主義は新渡戸博士を得て益々現実とならん(第12巻第2号, 1909年1月15日)。

²⁰ 佐藤昌介「躍如たる今後の大活動に囑目致候」(第12巻第2号, 1909年1月15日)。

²¹ 徳富猪一郎「記者としての新渡戸博士は天下の逸品」(第12巻第2号, 1909年1月15日)。

²² 浮田和民「博士は世界的武士道鼓吹の最適任者」(第12巻第2号, 1909年1月15日)。

²³ 第12巻第2号(1909年1月15日)p.19。

るところである。しかし、それを開催するには、莫大な費用と労力を要するので、日本ではまだ一度も挙行されたことがない。そこで今回、実業之日本社は費用と労力を提供して、文部省協賛の下に、展覧会を計画することにしたのである。

この広告文の中には、展覧会の趣旨と性格が明らかにされているが、「我社の一大壮挙を発表す」（『実業之日本』第15巻第7号，1912年4月1日）では、小学教育は各種教育の大いなる基礎にして新国民品性陶冶の大きな淵源であるから、全国の約9,000校の小学校の協賛を求めて大規模な展覧会を開催することにしたが、その目的は国民教育の鼓舞奨励にあると書かれている。

優れた作品を集めるため、実業之日本社はまず、全国2千余校の小学校を対象に出品を勧誘することにした。勧誘の対象となる学校は、各府県の視学が各郡から3校を選ぶという仕方であった。文部省では2回にわたって視学官会議を開いた。また、折から上京中の視学官92名を大隈伯爵邸で開かれた会議に招請した。日本の植民地になったばかりの韓国にも出品を促した。韓国皇族の来場もあり、「日韓併合」の事実をあらためて知らせることに配慮したことがうかがえる。これらのことを視野にいと、民間が主催する展覧会でありながら、官の力をも動員し、国家目的に添った催しであったと言える。

展覧会の会場には、上野公園竹ノ台（現在の東京都美術館の場所）にあった商品陳列館を当て、全国各地の約1,300の小学校の児童生徒の「図画」「工作」「作文」「習字」「裁縫」など約12万点を陳列した。小学生を対象としたこれだけ大規模な催しは、日本ではむろん初めてのことであり、実業之日本社としても、初めて経験する大事業であった。

そのために開催に先立ち、京橋区三十間堀一丁目五番地に準備事務所を設け、開催事務の万端を石塚月亭が担当することにしたが、展覧会の総裁には大隈重信を戴き、会長には増田義一が就任した。また、文部省、東京高等師範学校、東京女子高等師範学校のほか、教育専門家20数人にも協力を依頼した。

作品は、「書方」「綴方」「図画」「裁縫」「手工」の五分野に分けられた。『少女の友』1912年8月号によると、出品規定は次の通りである。すなわち、「書方」は尋常科四学年以上の各学年。「綴方」は尋常科三学年以上の各学年で、尋常科六学年に限り「親の恩」という題を課した。「図画」は尋常科一～三学年に記憶画、四学年に臨画、五学年に考案画、高等科一学年に写生画、二学年に考案画を課した。「裁縫」は尋常科四学年は随意、五学年は一つ身襦袢、六学年は一つ身単衣および補綴法、高等科一学年は一つ身袷衣、二学年は一つ身綿入および補綴法であった。「手工」は尋常科四学年以上の各学年に課したものであるが、材料および大小は随意であった。

作品のほかにも、教育参考品として諸外国の教育品、諸種の玩具、飛行機模型な

どを出品した。このイベント方式は後年、盛んに開催されることになる教育博覧会の先駆けであったと言える。また、『日本少年』『少女の友』の二誌がいかんにして作られていくのか（雑誌というものは、どのような工程を経て作られるのか）ということテーマにして、滝沢素水の冒険小説や有本芳水の少年詩の原稿から、活字の文選・組方・紙型・ステロー（鉛版）という印刷製本までの過程を展示することにした。このようにして自社PRにも怠りのなかったことはむろんのことである。

5月25日の開会とともに、会場は小学校児童、教育関係者、一般保護者などの来会者で埋め尽くされるという盛況ぶりであった。ことに会期中に、皇太子（後の大正天皇）や皇孫三殿下（後の昭和天皇、秩父宮、高松宮）が連れだって来場したことは、当時としては破格のことであった。また、乃木大将をはじめ多数の高位高官も来場した。それによって、この展覧会の評判は一段と増したが、それとともに、主催者である実業之日本社の社会的信用も著しく高めることになった。

展覧会は、2週間の会期をさらに4日間を延長して、6月18日に大盛況裏に閉会するが、一日あたりの一般入場者は平均約3,000人、団体入場者も同じく約3,000人であり、会期を通じてはおよそ16万人の入場者があったという。入場料は一人につき5銭であったが、小学校児童の団体は無料とした。

展覧会当日の盛況について、当時『少年世界』記者であった木村小舟は次のように記している。

『日本少年』と『少女の友』とが、兄妹肩を駢べて、天下の信用を高め、且またこれが発行部数を増加して、断然斯界の第一人者を以て任ずるに至りしは、かの上野公園陳列館に於ける、全国少年少女成績品展覧会の開設に依りて、異常なる効果を収めしことが、其の最大の導火線たりしは、亦否み難い所であらう。

此の成績品展覧会は、『日本少年』と『少女の友』とを発行する実業之日本社と関係深き大隈重信を総裁に戴き、多数高名の人びとを賛助員とし、両雑誌の勢力を十二分に駆使して、広く全国都鄙の各小学校に喚びかけ、児童の手に成れる図画、清書、作文、手工、其の他あらゆる成績品を大集し、これを選抜して順序を定め、陳列場の内外には手の及ぶ限りを尽して装飾を施し、桜花爛漫の時節を期して、華々しく開設せるものである。何事も宣伝の世の中ではあり、殊に宣伝の巧みなる実業之日本社の企画ではあり、為めに連日入場者雲集し、殊に高貴の御方さへ、御来観あらせらるるといふ有様にて、私設の展覧会としては、稀に見る名誉を博し、大成功裡にその幕を閉ざした。

さればこそ、この事あって以来、両誌の勢力は、真に旭日昇天の概を来し、為に多年牢

固たる地盤を擁したる『少年世界』すら、聊か後方に墮着たるの感なきを得なかつた。²⁴

また、同時期の主要新聞にも、この展覧会の記事や広告文などが見られた。開催初日の5月25日の『万朝報』の「見るもの、聞くもの」の欄には、「全国小学校成績品展覧会 上野竹の台陳列館にて」という記事が載った。また、5月29日の『東京毎日新聞』の第4面に、「少年少女に絶好の刺戟を与え学ぶ事を奨励せしむる最善最良の好機会、少年少女は勿論子弟の教育に心を砕く父兄は必ず見遁すべからず」のような広告も掲載された。

5月26日の『都新聞』の第5面では、以下のように報じられている。

実業之日本社の主催で昨日から六月十三日まで上野公園竹の台の陳列館に開く。品目は日本全国に及び、遠く英、米、独、仏、伊等の小学生の手に成れる作文、習字、図画、手工、裁縫等十二万余点にて。昨日は入場者約三千人の盛況を呈せり、尚明日二七日は発会式を挙げ、総裁大隈伯爵、渋沢男爵、西園寺首相、長谷場文章、嘉納高師校長、上田、新渡辺両博士等の演説祝辞ある筈。(句点は筆者によるもの)

前述したように、日本において小学生を対象としたこのような大規模な催しは、むしろ初めてのことであった。しかし、商業雑誌の発行所である実業之日本社としては、一方では商業的戦略もなかったわけでもないであろうが、あくまでも児童の教育に主眼を置き、教育事業に寄与したいという増田の願望に基づくものと考えてもよいであろう。

また、皇太子および皇孫の来場はともかく、西園寺公望首相をはじめとする政界の要人が発会式に集り、それぞれ祝辞を述べたことだけでも注目される。たとえば西園寺首相は、「本邦の普通教育に寄与する所すくなからざる」と評価し、文部大臣長谷場純孝の祝辞では、この展覧会が、学校教育実績の比較攻究を促進し、教育の当事者に対し裨益を与えるだけでなく、一般社会に対しても参考の資料を提供する極めて有意義な事業であると高く評価した。さらに東京帝国大学文科大学長上田万年も、展覧会は教育に関する趣味と理解とを公衆に授け、教育家たちが相互に切磋琢磨するのに絶好の機会であるとして、その効果を評価し、多くの好成績の作品の中でも、個性の豊かなものは看過すべきではないと強調した²⁵。

優秀作には賞牌と賞状が出された。審査員は青山師範、東京高等師範、東京女子高等師範の教諭・訓導から各分野ごとに2名(綴方は6名)を選任した。選考の結

²⁴ 木村小舟『少年文学史』明治編、下巻(童話春秋社、1942年) p.283~284。

²⁵ 『少女の友』第5巻第8号、1912年7月1日。

果、金牌は各分野につき3名であった。銀牌も各分野につき200名程度選ばれ、ほかに各学年を通じて成績良好と認められた学校に褒状が贈られている。褒賞式は同年6月30日、神田一ツ橋にある帝国教育会で行われた。文部大臣長谷場純孝は「我国教育ありてより以来嚆矢の大事業」として評価し、また、帝国教育会長の辻新次は「教育の向上を促がし国家の進運を資くる功多大也」とその意義を認めた²⁶。

ともかく、この小学校成績品展覧会の開催を契機にして、児童教育が人びとの関心を集めるようになったことは実業之日本社の功績として評価してもいいであろう。

同時に、この年、『日本少年』の発行部数は15万部、『少女の友』は8万5千部にのぼり、少年少女むけの雑誌としてはかつてない部数に達した²⁷。その結果、実業之日本社は、明治期を代表する児童雑誌出版社であった博文館を凌駕し、業界の頂点に立つことになった。この時期の展覧会の開催は、実業之日本社の隆盛ぶり内外に見せつけたものだったと言えよう。

(2) 各地における講演会の開催

A 各地の講演会の盛況

この時期の実業之日本社のもうひとつの大きな事業は、各地で講演会を開催したことである。実業之日本社は、関東地方、特に東京ではかなりの読者を抱えていたが、それ以外の地域ではあまり多くなかったことから、何よりも先に関西に目を向け、主要都市である名古屋や京都・神戸・大阪で相次いで講演会を開くことにした。

『実業之日本』誌上には、次のような講演会予告と「確定」(関西大講演会次第書)が発表された。

実業之日本社関西大講演会

我社は関西各地の愛読者並に有志者諸君の懇望に応じ茲に大講演団を組織し来る五月上旬を以て名古屋 京都 大阪 神戸等の関西各都市に実業之日本社独特の大講演会を開催せんとす我社は此講演の効果をして出来得るだけ有効ならしめんが為平生我社に向て最も深厚なる同情を寄せらるる大隈伯に向て此講演団を指導せられんことを請ひたるに伯は百忙の身なるにも拘はらず万障一掃決然として陣頭に立たんと快諾せられ我社講演団の中堅となりて社長と共に出発せらるる事に決定せり計画の詳細、出演者の姓名、並に各地方賛助員の姓名等は五月一日発行の実業之日本誌上に発表すべし請ふ刮目して待たれよ

²⁶ 長谷場純孝「我国教育ありてより以来嚆矢の大事業」ならびに辻新次「教育の向上を促がし国家の進運を資くる功多大也」(第15巻第15号, 1912年7月15日)。

²⁷ 前掲・木村小舟『少年文学史』明治編、下巻, p.284。

確定!!!

前号予告の如く愛読者並に各地有力者諸君の熱烈なる懇請に依り開会する事となりたる我実業之日本社主催の関西大講演会は左の如く確定せり大隈伯を講演会の中堅とし、名古屋、京都、大阪、神戸の四大都市に於て、五月五日より同十一日に亘る大活動は蓋し空前の壯観ならん奮て御来聴あらん事を請ふ

▲名古屋講演会（傍聴無料）

五月五日午後一時より同市本重町新守座にて開会

講演者 △伯爵 大隈重信氏
 △早稲田大学長法学博士 高田早苗氏
 △実業之日本社社長 増田義一氏
 △森村組総理 森村市左衛門氏
 △名古屋商業会議所副会頭 上遠野富之助氏
 △実業之日本主筆 石井勇氏

▲京都講演会（傍聴無料）

五月六日午後一時より三條柳馬場青年会館にて開会

講演者 △伯爵 大隈重信氏
 △京都大学教授文学博士 谷本富氏
 △実業之日本主筆 石井勇氏
 △早稲田大学長法学博士 高田早苗氏
 △実業之日本社社長 増田義一氏

▲大阪講演会（傍聴無料）

五月十日午後一時より同市中ノ嶋公会堂にて開会

講演者 △伯爵 大隈重信氏
 △山口銀行顧問 町田忠治氏
 △実業之日本主筆 石井勇氏
 △早稲田大学長法学博士 高田早苗氏
 △実業之日本社社長 増田義一氏

▲神戸講演会（傍聴無料）

五月十一日午後一時より同市神港倶楽部にて開会

講演会 △伯爵 大隈重信氏

²⁸ 「実業之日本社関西大講演会」（第13巻第9号，1910年4月15日）。

△実業之日本社社長 増田義一氏

△早稲田大学長法学博士 高田早苗氏

△実業之日本主筆 石井勇氏

右に就き大隈伯爵増田社長は五月一日午前八時三十分発の急行列車にて東京出発の予定なり

東京 実業之日本社²⁹

各地の講演会は、大隈重信を中心としたものであり、そこからは実業之日本社と早稲田大学の宣伝を行うという意図は明らかである。早稲田大学学長の高田早苗の参加も、実業之日本社と早稲田との深い関係を示している。しかし、各地の商業会議所幹部や大学教授、銀行関係者（町田忠治はやや特殊な身分だが）の出演も、講演会の内容に色彩りを添えた。

講演会のテーマは、実業界の良風作りの提唱や「実業的帝国の建設」への呼びかけなどが中心であった。たとえば名古屋講演会での大隈重信の演題は「実業界の良風を論ず」、増田義一は「時代の要求する奮闘主義」であった。京都講演会での谷本富は「商業道徳の新意義 営利と道徳は此点に於て両立す」、大阪講演会での高田早苗は「実業的帝国を建設せよ」であった。また、大隈は大阪では「国運の前途と国民の覚悟」を、神戸では「我商人の世界的遠征」を、演目に掲げた。

講演会の様子を見てみると、まず京都講演会の盛況ぶりについては、第三高等学校の生徒が「課業を休みて来聴」したことや、また満員札を掲げて入場を謝絶したところ、熱狂的な来会者は、「地下室の玻窓を破りて入」ったり、「便所の玻窓を打壊して入」ってきて、制止することが出来なかったというような事実が報じられている³⁰。それどころか、「人梯子を作りて二階の窓より入」ってくる者すらあったという。さらに、講演者の一人である京都大学教授の谷本富は来場の際、正門と裏門が両方とも群衆で埋められ、しばらく門外に立往生するほどであった。さらに、予定以上に多数の来会者があったことから、場内の温度がかなり上がったのみならず、一人の聴衆が胸部を圧迫されて人事不省の状態に陥った。そのために、警官を呼んで救出を依頼する事件まで発生したのである。

大阪講演会は、当時日本で最大の会場であった中ノ島公会堂で開会したが、来場者の中には草鞋を履いて遠隔の郡部よりわざわざ来聴する者もあったし、弁当を持参して予定の時間より2、3時間前に来る者もあった。この会場では結局5千人以上

²⁹ 「実業之日本社関西大講演会次第書発表」（第13巻第10号，1910年5月1日）。

³⁰ 「実業之日本社京都講演会」（第13巻第12号，1910年6月1日）。

の聴衆を迎えたが、それは大阪開市以来の未曾有の人数を集めたものであった³¹。

神戸講演会では、雨天の中を各地からの来場あり、午後の開会であるにもかかわらず、正午前には早くも満員となった。会場内には、通路のみならず、花道と演壇の上までも聴衆が充満したという³²。

以上の盛況からも伺えるように、『実業之日本』の影響力は、実際には関西では相当なものであった。もちろん、実業之日本社はこれを宣伝広報のために開いたことは言うまでもないが、これらの講演会の人気の程が伺える。

三年前の1907年に行われた『実業之日本』の創刊10周年園遊会は、あくまでも記念事業としての宣伝活動であったが、この時の関西各地での講演会は明らかに営業効果を目指して積極的に計画・実行したものであった。このことについては、新渡戸稲造も後の報告会で総括しているが、これらの講演会はまさに「一種の広告」そのものであった³³。このように、宣伝方法としての講演会を開催したことは、実業之日本社のもう一つの新しい手腕として注目すべきことである。

明治末期には、講演会が流行となっていった。牧野健一郎氏は、この時期は「自由民権運動の流れを受けた演説の時代から、高等教育を受けた一般公衆に向けた講演の時代にはいっていた³⁴」としている。それらは、新聞社や雑誌社がその主催者になることが多かった。たとえば、大阪朝日新聞社は、実業之日本社の講演会に先立って1907年7～8月に関西各地で連続講演会を開いた。さらに翌1908年夏には、東京朝日新聞社がやはり関東各地を巡回する講演会を開いている。そして以後、東西の朝日新聞社は、毎年のように巡回講演会を開くようになるのである。

映画やテレビなどの映像がまだ生まれていなかった当時の人びとが、著名な人士を直接に見る機会はほとんどなかった。特に、地方であればなおさらそうであったろう。これらの講演会が、どこでも超満員という状態になるのは、当時の状況であれば当然だったとも言える。実業之日本社は、そのような「講演の時代」を作り出す中心的な役割を担ったのである。

B 大隈重信と『実業之日本』

大隈重信は明治・大正政界の元老の一人でもあり、また早稲田大学創立者としても教育界の先覚者であった。しかし、実業之日本社にとっても、もっとも深く関わった人物の一人であった。平素から大隈は、増田が早稲田出身であるところから

³¹ 「実業之日本社大阪講演会」(第13巻第13号, 1910年6月15日)。

³² 「実業之日本社神戸講演会」(第13巻第13号, 1910年6月15日)。

³³ 「我社関西大講演会報告会」(第13巻第12号, 1910年6月1日)。

³⁴ 牧野健一郎『新聞記者 夏目漱石』(平凡社新書, 2005年) p.155。

「余は早稲田の関係より斯の如き成功者の現れたるを衷心より喜ぶものなり」と言い、社業に関しては「実業之日本の発展は決して偶然ではない。その説くところは単に富を得るといふ欲望に流れず、すなはち各人をして健全なる成功を得せしめるに在つて、教訓が商工業者並に諸会社の傭人に大なる利益を与へているといふ一事が、社会の同感を集めるに至つたものであらう³⁵」と評し、実業之日本社の催す種々の記念行事、講演会などにも率先して後援するなど、常に深い理解と援助を惜しまなかつた。

実業之日本社主催の関西講演会には、その大隈が講演会の全行程に参加した。その動機はいろいろあつたが、もっとも確実な理由は、その直前に出版した彼の著書である『国民読本』の宣伝のためであつたと思われる。そのほか、本人も自ら述べているが、社長の増田義一が早稲田出身であり、早稲田大学拡張のために、この講演旅行に参加したのである³⁶。

増田との関係については、「吾人の朋友」であると大隈が述べているのが興味深い。大隈はまた、『実業之日本』を早稲田精神の伝播者であると評価している。すなわち、早稲田大学は立憲的国民を養成し、国民の模範となるべき人材を養成し、国の文明を高め、富を増進し、国民道徳を高めるということを趣旨目的として教育事業に務めているが、実業界に奮闘努力する『実業之日本』は実業家を拵えようとする早稲田精神と一致しており、実業之日本社は経済的、実業的の両面において早稲田精神の伝播者・伝教者であるというのである。

名古屋講演会での大隈のテーマは「実業界の良風を論ず」であつた。この講演の内容は「実業之日本に対する感想」「雑誌の時代的勢力」「新渡戸稲造博士の人物」「実業之日本の勧善主義」「処世上の必要読物」「婦人少年少女幼年の読物」「森村翁と実業之日本」の7部分からなっているが、『実業之日本』に対する賛美が中心的な内容であつた。

しかし、ここでも早稲田と『実業之日本』との関係を強調して、『実業之日本』は「早稲田大学の畠より萌出た」ものであり、執筆陣にも10数人は早稲田出身なのであるから、早稲田は間接的ながら『実業之日本』の発展に貢献したと述べている。また、新渡戸稲造が『実業之日本』の編集顧問に就任したことを高く評価して、社会に勧善懲悪を実行させようとする『実業之日本』の役割を評価した。そして、商業・工業・農業に従事するどのような人にとつても、『実業之日本』は処世上必読の雑誌であると述べるとともに、さらに『婦人世界』『日本少年』『少女の友』など同

³⁵ 大隈重信「国運の前途と国民の覚悟」(第13巻第13号, 1910年6月15日)。

³⁶ 同上。

社発行の雑誌の役割をも積極的に評価したのである³⁷。ここでの大隈は、やや突き放して表現をすれば、実業之日本社と早稲田の宣伝マン以外の何者でもない。

かなり後のことであるが、1922年1月10日、大隈重信は享年85歳で死去する。『実業之日本』は第25巻第3号（同年2月1日）を「大隈侯哀悼号」を組んだ。

(3) 明治記念事業・頌徳事業の提議

1912年は明治天皇の即位五十周年である。『実業之日本』は明治天皇即位五十年の大祝典を記念するために、永久の事業を考案したいと各界に呼びかけた³⁸。具体的には、「明治」の五十年の光栄の歴史を子孫に伝える記念事業を発案・提起し、数千通の提案書を、各大臣、前大臣、枢密顧問官、各元帥、貴衆両院議員、宮内省および外各省次官局長、各府県知事、官私各大学学長および教授、各市長、各師団長、各科旅団長、各府県男女師範学校長、文部省直轄学校長および実業界の各名士に送り、その回答文をその後の誌上に毎回掲載すると告げたのである。さらに、増田は提案書を掲載した同号の雑誌4冊を、天皇・皇后・皇太子・同妃に献納した。提案書に対する回答について『実業之日本』誌上でさまざまな意見が出されたが、そのなかの一つは、大隈による平和館の設立であった³⁹。

しかし、その後間もなく、同7月30日に明治天皇が崩御し、明治は大正と改元された。『実業之日本』（第15巻第16号、1912年8月15日）は、明治天皇が副島種臣に下した宸筆を付録に付け、全ページを明治天皇追悼の記事で埋めた。巻頭は、石井白露の筆になる「嗚呼明治大皇帝陛下」であり、その後大隈重信、金子堅太郎、芳川顕正、渋沢栄一、土方久元、石黒忠憲、阪谷芳郎、増田義一などの追悼文が続いた。

増田は、「明治大皇帝頌徳記念事業私議」の中で、「一大記念館を建築し、之を明治館と名づけ明治御治世の鴻業偉績を顕揚する為明治年間のあらゆる文物を蒐集網羅し永く之を後世子孫に伝ふる」よう提案した。この提案は神宮外苑の「聖徳記念絵画館」として実現する。

『実業之日本』は第15巻第17号（9月1日）・翌18号（9月15日）でも特集を組み、大隈重信「御慕しき最後のお訣れ」、若槻礼次郎「先帝を模範として国民全体大覚悟を要す」などの追悼文を載せ、さらに9月20日には、臨時増刊号として『御大葬記念写真』集を刊行した。また、『婦人世界』は、10月号で乃木夫妻の殉死を特

³⁷ 大隈重信「実業界の良風を論ず」（第13巻第12号、1910年6月1日）。

³⁸ 「今上御即位五十年祝典は何を以て記念し奉るべきか」（第15巻第3号、1912年2月1日）。

³⁹ 大隈重信「今上御即位五十年記念に関し実業之日本社の質問に答ふ」（第15巻第4号、1912年2月15日）。

集し、大隈重信「乃木大将夫妻の殉死」、棚橋絢子「乃木夫人は真に武士の妻なり」、嘉悦孝子「妻として良人に殉ずるは当然」などの文章を掲載した。

(4) 「利益金分配制度」の採用

1912年11月、実業之日本社内は社内で「利益金分配制度」(パートナーシップ)を実施した。この制度は、営業上の利益金を社主と社員が一定の比率で分配するもので、19世紀半ばにイギリスで始まり、次いでドイツ、フランス、アメリカなどでもかなり広く行われたものである。日本の大企業で、この制度を初めて採用したのは久原鉱業であり、同年9月のことである。

翌1913年の『実業之日本』の新年号(第16巻第1号、1913年1月1日)は、巻頭言に「旧時代の夢は破れたり、事業共営主義の新現出、実業組織大改革の急先鋒パートナーシップ、聞け、社員に七十万円の株式を分配したる近来の大快挙」と掲げるとともに、パートナーシップについて8ページにわたり詳細に紹介している。さらに、法学博士堀江帰一「産業の平和労働郊程の増進及び収益の増加と利益分配制度」(同号)、東京高等商業学校教授上田貞次郎「吾人の見たる二種のパートナーシップ」(第16巻第2号、1913年1月15日)、神戸高等商業学校教授津村秀松「商業上に起るべき社会問題解決法としての利益分配制度の是非」(同号)などの学者の研究のほかに、編集記者による実際面の取材記事を載せ、パートナーシップを日本に取り入れる場合の得失を論じている。

増田がこの制度を採用したことについて述べていることをまとめれば、それは次のような理由からであった⁴⁰。

第一に、苛重な労働に対してそれにふさわしい報いをしようとしたためである。実業之日本社員には日曜も祭日もなく、朝は早くから、夜は編集室で食事をしている者も少なくなかった。石井白露のように、疲れたら机の上にゴロリと寝て一睡し、あるいは近くの銭湯に一浴して気分を新たに、さらに原稿を書くといった状態のまま、夜10時ごろまでも社にいて筆をとることが珍しくなかったのである。この制度は、こうした実状に対して、働く社員には待遇面で十分に応じようとしたものであった。

第二に、その当時、産業・経済に関する雑誌の世界では、掲載記事に代償を求めるケースもまれでなく、雑誌記者は絶えず金銭の誘惑にさらされていた状況への対応の面もあった。実業之日本社は、方針として取材先から金銭を受け取ることを厳に戒めていたが、さらに、そのような風潮から社員を守るために、待遇を厚くして

⁴⁰ 前掲・『実業之日本社百年史』p.64。

生活を安定させることを目ざし、利益金分配制度を社内に導入したのである。

実業之日本社が隆盛であったこともあるが、この制度の導入により社員は当時の一般諸会社に比べて破格の厚遇を受けることとなったのである。

第4節 『実業之日本』の論調

(1) 煩悶青年への対応と「修養」の強調

日露戦争後、日本人の中に「大国」意識が芽ばえはじめ、同時に経済の面では企業熱、実業ブームも起こってきた。しかし、その一方で、庶民の生活難とそれに起因する社会問題は、「大国化」を謳歌するにはあまりに深刻であった。また、この時期には、「煩悶」「神経衰弱」という語が流行し出した⁴¹。「煩悶青年」の出現については、伝統的な家族道徳の崩壊、日露戦争以降の目標喪失状態、さらには国家を至上として進めてきた近代化に対する反動などが、要因として挙げられている⁴²。つまり、一元的に「国家」に価値を求める思考から離れ、かわって「個人」に重きをおく青年たちが登場してきたのである。それは、家族や国家を離れて、個人主義に目覚めた「新世代」の誕生であるといえる。しかし、彼らはしばしば挫折を経験し、懐疑に陥ることもあった。そして、厭世観にとりつかれて自殺する若者も出てきた。藤村操の自殺事件⁴³の後、他の青年が彼の自殺をそっくり模倣するということが流行となった。その後、数年間にわたって新聞には「厭世観」による自殺の記事が後を絶たなかった⁴⁴。

『実業之日本』が1905年に、定期的な特集記事「人生の慰安」を組んでいたことから分かるように、編集顧問の新渡戸稲造をはじめ編集者たちは、読者の中にも多くの煩悶青年がいることを憂慮していた⁴⁵。そして、『実業之日本』は満たされな

⁴¹ 「日清・日露戦争と帝国日本」(金原左門編『日本の近代化と民衆』第三章、日本放送協会学園、1988年) p.89。

⁴² こうした見方はすでに以前から指摘されている。代表的なものを挙げれば、以下のようなものである。神島二郎「明治の終焉」(『近代日本思想史体系 近代日本政治思想史Ⅰ』第三卷、有斐閣、1971年) p.381~424。鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』(筑摩書房、1969年)。隅谷三喜男「国民的ヴィジョンの統合と分解」(『近代日本思想講座 第五卷 指導者と大衆』、筑摩書房、1960年) p.9~42。

⁴³ 18歳の第一高等学校生、藤村操の自殺が有名な事件であった。1903年5月、彼は「巖頭之感」と題する遺書を刻み華巖の滝に投身した。この遺書の中で彼は、自らが人生を理解できないことを嘆き、絶望の中に平安を見出そうと言いつつ放った。

⁴⁴ 青年自殺の増加と藤村事件に結びつける意見としては、大塚素江「自殺と青年」(『太陽』第9巻8号、1903年7月、p.207~213) および、富士川游「自殺問題」(『中央公論』第21巻11号、1906年11月、p.41~48) などがある。これらの評論は、自殺の増加の原因がたんに統計上の整備やマスコミの発達によるものとは考えていない。

⁴⁵ 新渡戸稲造「余は何故実業之日本社の編輯顧問となりたるか」(第12巻第1号、1909年1月1日) p.7~9。

い中等学校卒業者を実業へと強く導き⁴⁶、さらに新人格の建造を唱えるなど⁴⁷、誌面には修養に関することや、人生案内的な内容がいつそう大きな比重を占めるようになった。

また、日露戦争後の一つの傾向として、青年向けの教訓・処世訓が流行した。そして、神官・僧侶・牧師・伝道師・教師・役人・浪人・文士・講釈師といったさまざまな人びとが、青年たちを指導する営みに参加した。もっともそれに対しては、その種の書物を印刷する用紙のために、数千本の樹木が切り倒されていると、皮肉をこめて嘆いて見せた同時代の論者もいたという⁴⁸。『実業之日本』の記事に、煩悶への対処の問題に多くの関心を示すものが多くなったのも、このような時代的潮流の反映である。

その対応策として宗教に対して多くの関心が寄せられ、たとえば岡田虎二郎の「静坐法」に関する特集なども組まれた⁴⁹。著名人の「人生観」についての記事も、類似した性格をもっていた。これらの記事に共通していたのは、困難に直面し、自信を失い、煩悶に陥った人物が、親の苦心に気づき、また自分が国家に対して義務を負っていることに思い至ったときに、煩悶から解放され、「立身」をめざすようになるという、経験談が述べられていることである。

『実業之日本』の読者は、新渡戸稲造からも同様の内容の助言を受けていた。煩悶青年が登場した頃に、第一高等学校長であった新渡戸は、「貧者は絶えず世にある」といった文句をはじめとして、キリスト教的教義を引用して、忍耐や努力といった徳目を例示した。

同誌にはほかにも、修養に関する文章や記事が多数見られた。たとえば、第11巻第2号（1908年1月15日）の巻頭では、「本号ノ新生面」と題する文章が掲載された。その主要部は次の通りである。

時勢ノ進歩ト共ニ、常識修養ノ必要ハ益々緊切ヲ加ヘ来レリ。但常識ノ事タル、言フハ易ク学ブニ難シ。依テ吾人ハ新年ノ一事業トシテ、我先進大家ニ就テ其説話ヲ求メ、或

⁴⁶ 「起てよ独立自営の時代は来れり」（第9巻第1号，1906年1月1日）p.12～14。

⁴⁷ 増田義一「我社の編集顧問として新渡戸博士を迎ふるの辞」（第12巻第1号，1909年1月1日）。

⁴⁸ 岡義武「日露戦争後における新しい世代の成長」（『思想』第512号・513号，1967年2月・3月）。

⁴⁹ 1911年から翌年にかけての、ほとんどの号でこの問題に関する記事が掲載されている。前掲・岡「日露戦争後における新しい世代の成長」p.368～369。静坐法に関する文献は多いが、木下尚江や田中正造などこの時代を代表する人びとが、静坐法にひきつけられた理由については、稲田雅洋『悲壯は則ち君の生涯なりき』（現代企画室，1987年）の第2部の二「転機」に詳しい。

ハ学説上ヨリ、或ハ実験上ヨリ、研究解説シテ、世人ガ修養ノ資料ニ供ヘント欲ス。

また、1908年1月1日の『実業之日本』新年号（第11巻第1号）からは、「常識は如何して修養すべきか」との欄を増設して、号ごとに著名人の文章を掲載している。加藤高明・菊池大麗・戸水寛人・大隈重信などである。

これらの文章は、ただちに読者から好評を得た。第11巻第3号（1908年2月1日）には岩橋鎮雄の「『実業之日本』を読み感奮せる在米の一青年」という寄稿があった。その内容を要約すれば、次のようなものである。彼がアメリカの列車に乗っていたときに、『実業之日本』を読んでいると、同じ車室にいた日本人の青年から嬉しげに「実は余も亦其愛読者の一人なり」と声をかけられ、旅中にいろいろ会話を交わした。その青年の持っていた『実業之日本』を見ると、赤い鉛筆で所々にマークがつけられており、熱心な愛読者であることがわかった。青年の話では、彼は一時困窮と失望の中で、消極的な暮らしに陥ったが、米国フルーゲルの「如何にせば成功すべきや」（第6巻第5号、1903年3月1日）を読んで、過去のことを悔恨して農場の経営をはじめ、厳格な精励と必死の奮闘との結果、周りの人からの信頼を勝ち得ることとなり、着々と事業の地盤を築きあげることができたとのことであった。そして、その青年が『実業之日本』に載っていた成功例に感激して自らの品性を陶冶していったという。

岩橋は、このような事実を挙げながら、『実業之日本』がいかに読者を鼓舞・鞭撻・慰安する力を持っているかを物語るものであると記し、それを結語としたのである。

（2）「実業の帝国」の建設

日露戦争後、日本が一等国に躍進したとの認識は一般の大衆まで及んだ。そして、『実業之日本』も、名実相伴う帝国を確立するには「実業の帝国」の建設こそもっとも急務であると主張した⁵⁰。

具体的には次のような内容である。すなわち、日露戦争では日本は武力によって一等国になったが、経済力はまだ乏しく、多額の負債を背負っており、このままでは長続きはできない。実業の力で国力を充実させ、国の富を増進する道だけが一等国としての永続性の保証につながることになる。また、海外への拡張にあたっては、貿易は国旗に従う方式と、国旗は貿易に従う方式という二種類がある。しかし、日本はイギリスのように実業家の海外への進出によって国の拡張を実現させるべきである。つまり、後者の方式である。武断的な帝国主義は害が大きく、ほかの国の誤

⁵⁰ 高田早苗「実業的帝国を建設せよ」（第13巻第12号、1910年6月1日）。

解を招く恐れがあり、日本はどこまでも道徳的、実業的、通商的帝国主義をとるべきである。つまり、実業的大帝国の建設に努めるといふことこそが、一等国の国民の任務である。

このように、『実業之日本』は、あくまでも「実業の帝国」の建設を強調し、武断的帝国主義をとるべきでないとしたのである。

また、『実業之日本』は、政府の財政と民間経済との関係について、財政は常に民間経済の発達に伴わなければ、健全な発展を得られないと説いた。つまり、日露戦争後の日本経済は著しく発展を見せたが、欧米諸国と比べれば国力はまだ弱く、そのさらなる発展には、民間経済の発達が最も急とされるべきであると主張したのである。この観点は、渋沢栄一の「四十一年の経済界」(第11巻第1号, 1908年1月1日)に典型的にうかがえる。そこで、渋沢は次のように指摘している。国力の進歩は事業の発展に他ならず、時勢に従い新事業を興したり旧事業を拡張したりして、国富の増進を図るべきである。経済界は一部で活況を呈しているにもかかわらず、全体としては沈衰をし続けている。その最も大きな原因は、「頭重」のためである。政府は大きな力をもっているのに1908年度以降の予算では、その方向が不明である。つまり、民間経済を保護する財政計画が建てられていないのである。そのために、経済界は前途に危惧を抱かざるをえない。

このようなことが、この時の渋沢の警告であった。また、渋沢は財政についていかに対処すべきに関しては、以下の二つの提言をしている。第一に政費を節約し財政の膨張を避けて、経済力において負担できる財政計画を建てること、第二に国民はますます奮励し勤勉であるべきこと、である。渋沢は、そのことを納得させるために、イギリス人ハインとフランスのフヒナリーの文章を引用する。すなわち、日本は、軍備拡張のために増税と公債募集による道をとったが、これ以上の外債の募集は日本の信用を傷つけ打撃を与えることになるだろう。日本の軍事面における地位と勢力はすでに列国の間に認められているが、更なる軍備拡張はかえって各国の疑惑をもたらしてしまう恐れがある。

このようにして、西欧の識者の発言を援用しながら、渋沢は財政緊縮を促し、非生産的事業への出費を節約すべきであると訴えたのである。

(3) 軍事主義的財政への批判

日露戦争後の『実業之日本』は、政府が多大な軍事支出を行い、増税策をとり民間経済を抑制してきた姿勢を批判し続けた。すなわち、それは実業の発展を妨げるものであるとして、徹底的に反対する方針を貫いたのである。

たとえば、「増税は国運の発展を防ぐ」(第11巻第3号, 1908年2月1日)では、

軍事拡大中心の財政を強烈に批判した。そのなかで、国運の伸張は唯一民力の伸長にあり、民力を伸ばさずに、軍事だけを拡張すれば、国家の実力はその源を失い、経済は大不振となるに違いないと警告する。そして以下のように言う。

今ここで、軍事費の大繰延、減債基金の中止、各種剰余金繰入などを行えば、3、4年後の歳入の自然的増収および関税の増収だけでも、時局の必要費用を補うには十分である。したがって、非募債・非増税を主義として厳守し、増税を否定しなければならない。戦時中の消費税の増徴により、日常消費物の価格が騰貴し、生活費が急増してしまった結果、製造品などの市価が上昇し、日本の工業は他の国と比べると、競争力の点で不利益な地位に陥ってしまった。さらに、酒・砂糖などの増税により有害代用品が現出したことにより、国民の健康維持に多大の損失も生じる恐れがある。

以上のようなことを列挙して、増税が下層の庶民を苦しめるのみならず、各種の実業に対しても多大の打撃を与えていることの深刻さを強調したのである。さらに、財政計画の前途に関して、政府当局者の間でさまざまな暗闘が行われていた事実を挙げて、裏面の勢力である「元老」の無責任さを批判した。そして、実業家は大いに輿論を喚起して元老に影響を与えるとともに、本来、直接予算の協賛にあたるべきはずの300名の衆議院議員はいつそう努力をしなければならないとして、当時の政治家たちに苦言を呈した。さらに、立憲政治の体制下でありながら、閣僚が自由に行動できないような奇怪な現状を批判して、政党政治の実現をはかるべきであるとするとともに、最後に改めて不法な増税計画は徹底的に排すべきであることを強調したのである。

また、同号には、東京商業会議所会頭の中野武宮の「増税断じて不可財政は大整理を要す」も、次のように主張した。すなわち、日露戦争中、政府は非常特別税を設定し国民に重税を課したが、税目の中には産業の発達を妨げる各種の悪税があり、これらを一日も早く改廃しなければならない。だが、政府はそれを改めないばかりか、新税・増税などを取り続けているため、財政は混乱の極みにある。歳出の中でもっとも多いものは陸海軍の軍事費であるが、軍事のために国力にふさわしくない巨資を投ずれば、結局、国力を疲弊し国運の進歩を害することになるほかはない。増税は下流社会を苦しめ同盟罷工の端を開くのみならず、その弊害はやがて上流社会にも及び、資産家・製造家は安心して投資することはできなくなる。これでは工業の発展を阻害し、政府はますます歳入不足の窮境に陥ってしまう。これらの問題を解決するには、政府が財政の整理を断行し、増税計画を中止するとともに、歳出入の均衡を図らなければならない。

増税に対しては、その後、日本全国商業会議所連合会が反対を決議し、その運動

を展開することになる。また、銀行家・貿易業者たちも増税には反対の態度を示した。「無題録」(第11巻第2号、1908年1月15日)では、増税をめぐる各界の反応が、次のように語られている。

日露戦争の疲労漸く現はれて国本培養の急なる時、而かも非常特別税すら其俛なる矢先き、又も増税案を提出しやうと云ふのだから、国民挙て反対するのは当然だが、由来腰の弱いと攻撃せらるる実業家も今度は余りと云へば甚だしいと云つて反対の気焰諸所に起りかかつた。▲豊川良平氏は熱心なる大反対者の一人だが、今の財政の遣り方を評して壁に馬を乗せ懸けるものだと云つて居る。▲池田謙三氏は軍事を始め不急の仕事は大繰延を断行して、此处三四年は朝野挙つて実業奨励国本培養で行かなけりや、国家の前途寒心に堪へないと憤慨して居る。▲渋沢栄一男は今度の増税は消費税だから影響は少ないと弁解する者もあるも、課税後兩三年間は生産者の負担となつて其困難名状すべからず、目下の急務は政費の節約軍備の拡張を制限して生産業の発展国力の増進を講ずるこそ最も急務だと絶叫して居らるる。▲中野武営氏は増税には絶対的反対で此上の増税は国民の生産力を減殺し、其結果経済界に由々敷影響を与える。殊に酒、石油、砂糖、煙草皆労働者の必需品許りで、此等の物品が高くなれば勢ひ賃銀の値上げを要求する。強ては同盟罷工煽動の種子となると叫んで居る。▲菊池長四郎は日本橋倶楽部の新築落成式の際、大蔵大臣を招待したけれども、来られないのは却て幸ひであつた、日本橋は皆増税反対だからと笑つて居た。▲東京商業会議所の新年宴会が七日にあつたが、席上増税反対の声熾かんで何れも気焰万丈であつた。

さらに増田義一も、「実業を無視せる財政策」(第11巻第3号、1908年2月1日)で、増税措置は結局生産業の発達を阻害し、税率が高まるために消費が減じて利益が薄くなり、製造家の負担が大きくなるということを指摘した。具体的には次のような内容である。すなわち、目下、日本の政策としては戦後経営の改善が最も急務である。しかし、戦後経営で第一に大切なことは、民力を休養して国力を発展させることである。にもかかわらず、政府はこれと反対のことをして、実業の発達を妨害している。たとえば鉄道を国有にして国民に不便を与えている。また、政府は増税を続けているが、これは不景気を助長する一方である。にもかかわらず、内閣大臣の力が弱いので、日本の国力に相応した財政計画を立てることができないでいる。

そして、商工業者に対しては、これまでのような政府に盲従する姿勢を改めて、奮起して反対の声を揚げるべきであると鼓舞した。さらに、非増税の目的を達成するには、政治の表面に立っている人ばかりに頼ってはならない。すなわち、国民全体に影響する問題である以上は、あらゆる方法手段を講じて反対の意見を表明すべ

きであるが、それには全国の商業組合が増税反対の声を挙げることもっとも有効な手段であると示唆した。立憲政治下の国民であるからには、自分の頭に火のつくまで黙っているべきではなく、奮起して非増税の声を挙げるが必要であり、この目的を貫徹させることが国家のためになるのであると切実に訴えたのである。

このように、『実業之日本』は、日露戦後経営期に至ると、増税とそれに基づく軍拡を批判したのである。それはこの期の『実業之日本』の基調であると言ってもよいが、この二点はよく言われるように、大正デモクラシー運動を進めていくものたちの思想基盤となったものである。

(4) 「実業的」移民と商業の海外発展の鼓吹

軍事力の拡大による海外発展に反対するようになった『実業之日本』であったが、海外への積極的な移民と商業の海外発展については、日露戦争後から主張し続けていた。移民の成功は、移民自身の利益幸福のためだけでなく、移民先の国家も移民たちの勤勉により資源を開発できることになるなど、両者にとってプラスであると主張したのである。たとえば、「政府は一等国の名を辱しむる勿れ」(第11巻第7号, 1908年4月1日)の中では、経済関係に基づく移民を推奨すべきであり、たとえばアメリカの日本人移民に対する排斥のような民族的差別は打破する必要があると述べている。移民地としては、国内では台湾・北海道を、海外では「満韓」を推奨し、また多数の移民は国の工業の発展を阻害することになるという説に対しては、内地工業が進歩せず労働力の需要が少ない現状では、海外労働の方がはるかに利益があるとして、国民が移民を希望するならば、それに任すべきであり、それを抑制するのは発展的國家の政策ではないとした。

また、大隈重信も「商人の世界的遠征」(第13巻第14号, 1910年7月1日)で、実業家に対しては「世界的遠征」を行うべきだと提言した。つまり、商業には国境がないという観点に立ち、商業家自らが世界に雄飛し、世界の風俗習慣その他のあらゆる需要を十分考察すれば、それにより内地工業品の製造の道が拓けるはずであると強調したのである。さらに、国際間の競争で勝敗の分かれるのは、商業人が世界に向かってどれだけ働くかの度合いであると断言する。そのもっとも良い見本として、イギリスが全世界に商船を出し、商業的機関を設けた結果、今日の盛況を迎えることができたのだとしている。そして、日本が商業上の競争に勝つには、「日英実業同盟」を結成し、経済上の利害を一致させるならば、両国に必ず大きな利益をもたらすに違いないと述べている。

(5) 実業教育の提唱

さまざまな問題をはらみながらも、日本経済は全体としてみれば成長を続けていた。そして、その結果、出世が金銭的な基準で定義されるような風潮が生まれてくるようになった。「青年学問の傾向」(『国民之友』第310号、1896年8月、p.1~2)によれば、かつて、政治を夢見る青年が「天下国家」意識の過剰気味になっていたのに対して、日清戦争後に青年となった者たちは口々に「黄金黄金と呼び、金儲け金儲け」と叫び出したと指摘していた。日清戦争後の好景気が高学歴をもった青年たちの関心を実業界へと誘っていったのである。そして、この「青年学問の傾向」は、戦争によってもたらされたエネルギーが、科学・宗教・学問といった領域に投入されず、投機や成金目当ての事業に消えていくことを嘆いている。

日清戦争前は、実業学校は定員を確保するのにさえ相当に苦勞していた。学生募集の広告を新聞に出すことは、官立実業学校でさえめずらしいことではなかったのである⁵¹。ところが、戦後になると、多くの実業学校では、さして宣伝をしなくても定員が埋まるようになり、一部の学校ではかなり競争率が高くなった。東京高等商業学校は、1897年までは約2.8倍の倍率であったが、1904年にはそれが4.7倍に上昇した⁵²。この数字が、帝大に直結する第一高等学校のそれより高かったことを考えると⁵³、少なくとも青年たちの中で実業がかつての官吏コースに匹敵すると位置づけられるようになったことを示している。

そして実際、中等・高等教育の改革を求める動きは、すでに日露戦争前から強くなってきていた。たとえば、『教育時論』の巻頭文「青年の志望の一点」(664号、1902年9月、p.45)は次のように評している。

以前に於いては、中等教育を終了したるものの大多数は、高等学校に入学を志願し、高等商工業学校、外国語学校其他の実業学校の如きは、比較的少数者の向ふ所たるに過ぎずして、往々其の募集人員に充たざることすらありしに反し、近年に於いては殆ど彼此の位置を換へたるが如き観あり、これ畢竟従来の如く、盲目的に高等学校に向つて、突入するの弊を悟りて、真に時勢の要求する所を解し、虚名を棄てて、実力を養はんとする、着実なる考に出でたるものといはざるべからず、吾等は大に之を賀せざるを得ざるなり。

⁵¹ 深谷昌志『学歴主義の系譜』(黎明書房、1969年) p.114~117。および、唐沢富太郎『学生の歴史』(創文社、1955年) p.184~186。

⁵² 前掲唐沢『学生の歴史』の折込表「東京高等商業学校入学競争率」 p.202。

⁵³ 第一高等学校の入学競争率は、1895~1900年では1.9倍から3.0倍の範囲であった(『第一高等学校六十年史』、1939年) p.596。

この文章からも、この時期の中等・高等教育を志願する青年たちの中に、官吏の代わりに実業へとつながる道を歩きはじめた者が増えたことがうかがわれる。一部の高等教育機関（たとえば高等商業学校や高等工業学校）は、すでに学生募集広告の心配をする必要がなくなっただけでなく、むしろ狭き門となっていた。

一方、中学校から高等学校への志願率は、1898年の70%から1903年には35%へと低下している⁵⁴。だが、この低下は中学校卒業者が進路を高等学校から商業学校や工業学校へと変更したからではない。むしろ、この時期、高等学校の収容力に比べて中学校卒業者が急増していたことが大きな原因である。そのため、高等学校の入学競争が激化することになり、中学校を卒業しても高校入試に失敗し、行き場を失う者の数も増加してきていたのである。と同時に、実用的な教育に対する関心度はますます高まっていた。甲種実業学校（修業年限4年の高等小学校を卒業した14歳以上の者が入学できるもので、修業年限は3年であり、農業学校・商業学校・商船学校の三種があった）の入学者は中学校に比べて2倍のスピードで増加し、実業教育全体では4倍の増加率を示していた⁵⁵。そのようなこともあって、中学校がもはやエリート高等教育に直結しないと判断し、実業学校へ行ったほうが得策だと考える親や生徒たちが増えていたのである。実業学校は、高等学校受験のための教養型教育を提供する中学校とは異なり、少なくとも職業と結びついていた。しかも、実業学校は授業料も比較的安い理由もあった⁵⁶。

実業学校への進学推奨は『実業之日本』の誌面にもたくさん見ることができる。誌名の「実業」と合致しているのも、その主義主張に合っていたところもあるが、『実業之日本』は積極的に実業学校への進学を推奨していたのである。読者からも子弟の学校選択について、実業之日本社あてに相談の手紙が多数届いていた。具体的には、資力の乏しい者は中学と商業学校のどちらに入るべきか、農家の子弟はどのような学校に入るべきか、農家の子弟が商業学校に入るメリットにはどのようなものがあるかというような内容である。

これらの相談に対し、『実業之日本』は飽くことなく実業学校への進学を説得した。たとえば、増田義一が「子弟の学校選択に迷へる父兄に告ぐ」（第12巻第10号、1909年5月1日）では、中学校の価値は一般的な知識の獲得にあるが、実業学校、とくに商業学校の場合は、実際に社会で運用する「読み」「書き」「そろばん」を習得させ、実務的知識と実務的人格の培養を目的としているなどの理由を挙げた。また、高等学校の入試に失敗したり、受験準備に時間を費やすだけの経済的ゆとりのない

⁵⁴ 文部省『学制八十年史』p.1046～1047。

⁵⁵ 前掲・文部省『学制八十年史』p.1052～1053、p.1056。

⁵⁶ 前掲・深谷『学歴主義の系譜』p.363。

青年たちに対しても、『実業之日本』は受験をあきらめ仕事を探す方向を勧めている。

その頃、実業之日本社の『婦人世界』(1906年1月創刊)と『少女の友』(1908年2月創刊)の両誌は、発行当初から女性の読者から好評を受けてきた。『婦人世界』は今日の婦人誌のスタイルを創造したと言われてるように、家庭婦人用の実用記事と大衆読物を適当にミックスし、一般の人びと向きの編集内容を作った。また、『少女の友』は先に見たように、『婦人世界』の妹誌として位置づけられ、「よき妻」「賢い母」の予備軍をつくるための雑誌であった。この両誌がともに飛躍的發展を遂げた背景には、女子教育の普及によって、一般の婦女子が新聞や雑誌から自分たちの生活に必要な情報を読み取る能力を身につけた面も少なくない。実業之日本社の雑誌経営の戦略から見ても、女子教育を提唱することは、実に「時代の要求」に応えたものであったといえよう。

このような動きの中で、1903年10月に日本女子商業学校が設立された。このことについて、後に嘉悦孝子は「日本女子商業学校は何故に起りたるか」(『実業之日本』第11巻第4号、1908年2月15日)の中で、次のように回想している。

日露戦争後の日本は、実業の方面において世界と大戦争のできる時代を迎えており、男性の半身に当たる内助者である女子に対しても、商業・経済などの知識を授けることが求められるようになった。そのため、同校は教育方針として、穏健な経済思想を修得し、円満な常識を養成することによって、「よく働く婦人」「役に立つ婦人」「ものの分かる婦人」を作り出すことを掲げたのである。また、修業の内容については、専門の商業教育を授けるかたわら、普通の高等女学校で教授している学科も課程の中に入れた。たとえば裁縫科・割烹科などの科目も設けたのである。さらに、入学の学生数を増やすために、寄宿舎など施設の充実を図った。

日本女子商業学校は、このような状況の中で生れるべくして生れたと言える。しかし、この嘉悦の言を待つまでもなく、女子もまた時代に合った知識を必要とされていたのである。

1909年に申酉事件が起こった⁵⁷。これは、文部省が1908年、東京高等商業学校に、何らの連絡もせずに、東京帝国大学の法科大学に商科を設置して、同時に高商の専攻部を廃止すると決定したことから、高商学生がストライキを起こして対抗した事件である。『実業之日本』は商業教育の独立性・必要性を肯定し、商科大学の設立を強く主張した⁵⁸。ただし、商業教育は一種の専門的研究であり、現在の高等商業学校の学科には基礎的教育が欠けているという問題点を鋭く指摘した。さらに、この事件を古い思想と新しい思想との大衝突とみなし、高等商業学校の学生の自主的な退

⁵⁷ 一橋大学学園史刊行委員会『一橋大学百二十年史』(一橋大学、1995年)p.59~65。

⁵⁸ 「商大問題は斯の如く解決すべし」(第12巻第11号、1909年5月15日)。

学運動を「訓練ある国民の縮図⁵⁹」と褒めるとともに、官権万能の官僚政治を批判した。大学と社会との思想的交通が絶え、大学が一種の学閥を作り、もっぱらに城壁を高くしてみずから防壁のなかに密閉して外界と空気の流通さえしない弊風が存在している事実を指摘したのである。文部省から罷免された高等商業学校の佐野善作、関一、滝本美夫の三人の教授に対しインタビューを行い、それぞれの論理を誌上に発表して、輿論の支持を呼び起こした⁶⁰。もちろん、実業教育を提唱するこのような視点は、『実業之日本』創刊時から一貫したものであった。また、当時高商の顧問を務めていた渋沢と『実業之日本』との関係をも看過してはならない。

(6) 勸善主義と武士道精神

社会に善を勧めるということも『実業之日本』の大きなひとつの主張であった。前述した名古屋講演会で大隈重信は、『実業之日本』は善を勧め悪を抑える上で巧妙な役割を果しているのが大きな特色であると述べている⁶¹。すなわち、『実業之日本』は商業的道德を勧めることにつとめ、どのような困難にも打ち勝つための勇気を惹き起こすことの善についてしきりに訴えている。善を勧めることは、悪を生ずることを防ぐことになり、実業の良風俗を形成させるにはもっとも有効な手段であるというのである。

また、新渡戸稲造も勸善主義について次のように述べている⁶²。すなわち「元来世の中の改良には積極と消極との二手段がある。即ち所謂勸善懲悪である。懲悪は面白半分^マにやるものがある。敢て懲らすといふ精神があるのでなく、臭いものの蓋を開けて喜ぶといふ風なものが世間に沢山ある。これが日本人多数の人情であるらしい。醜状を暴露するのは懲らす目的であるといふが、実は臭いもの^マを開けて喜ぶといふ遣り方が多い。之に反して積極的に善を勧める、少しでも取る所があれば之を伸ばし助長するといふが実業之日本従来主義……」であるということである。

このようにして、『実業之日本』は誌上で勸善懲悪を主張し、実業家の商業的道德の養成に呼びかけた。

1909年に「日糖疑獄事件」が起きた。株価の大暴落の影響を受け、それまでに繁

⁵⁹ 「日本青年の意気未だ減びず、高商学生の進退は武士的なり」(第12巻第12号、1909年6月1日)。

⁶⁰ 佐野善作「高商教授の職を辞したる余の心事を告白す」、関一「是れ一千五百の学生を思ふ衷情のみ」、滝本美夫「商科大学問題に対する余の立場を明かにす」など。ほかに土屋長吉「高商事件に就て文部大臣に与ふる書」などがある(第12巻第12号、1909年6月1日)。

⁶¹ 大隈重信「実業界の良風を論ず」(第13巻第12号、1910年6月1日)。

⁶² 「我社関西大講演会報告会と新渡戸博士の演説」(第13巻第12号、1910年6月1日)。

盛をみせていた大日本精糖株式会社の経営が悪化し、破綻寸前となったが⁶³、それを機に、これまで隠していた不正経理が暴露されて、経営状況が明らかになったのである。そのことから会社は、さらに国会議員を買収するなど不正な手段によって、「砂糖税法」の延長などを目論んだりした。これが、いわゆる「日糖疑獄事件」である。この事件は、捜査に着手してから一審判決が出るまで、わずか 2 か月を費やしただけで解決した。しかし、国会議員に波及した事件であり、各派の有力議員 20 名が大日本精糖株式会社から多額の金を受け取っていたということから、大きな疑獄事件となったのである。

この事件は、当然ながら実業界にも大きな波紋を呼び起こした。その直前に新渡戸稲造を編集顧問として迎え、実業界の武士道を訴えてきた『実業之日本』は、この機会をタイミングよくキャッチして、実業界にも武士道精神を導入することがいかに重要であるかということを強調した⁶⁴。すなわち、武士道の精神を基礎とする商業道徳を扶植させることが必要であり、学校教育においても社会教育においてもこの方針を徹底させなければならないと主張したのである。

1912 年に入ると、『実業之日本』の寄稿者に軍人が次々と現れてくるようになる。これもこの時期の同誌の特徴のひとつである。軍備拡張政策の実行にともなって、忠君愛国を鼓吹し、戦争を正義化する論調が顕著になってきたのである。これまで『実業之日本』には軍人の寄稿者はゼロであったが、実業国民の精神はすなわち軍人精神と一致しているとの文章が多数掲載されるようになった。たとえば、当時の陸軍少将堀内文次郎は、奮闘の実業国民の精神は軍隊教育の精神とは一体同心であると主張し、「新操典綱領」の中の「攻撃精神は忠君愛国の至誠と献身殉国の大節より発する軍人精神の精華なり」という軍人精神は、実業上の武士道精神と一致すると説いた⁶⁵。また、第十八師団副官陸軍歩兵大尉蜂須賀喜信は、軍隊を群衆心理の研究所、克己心の養成所、規律厳守の修養所、体力発育の保険会社、礼儀作法の見習所、信義の模範所または質素の奨励地に喩えて、青年実業者の軍隊や軍学校への入学を強く勧告した。

またこの時期には、軍人出身の実業家の寄稿も少なくなかった。たとえば、元陸軍歩兵大尉の平沢耕平はダイヤ商会主となり、実業界に身を投じた後の感想を次のように述べている⁶⁶。すなわち、実業精神の精華は、忠君愛国の至誠と富国立身の大義より発する奮闘の精神であり、軍人精神と実業精神は同一のものであるのみなら

⁶³ 『万朝報』1909 年 1 月 5 日。

⁶⁴ 「我実業界の廓清と吾人の活動」(第 12 巻第 6 号, 1909 年 3 月 15 日)。

⁶⁵ 堀内文次郎「奮闘の実業国民の精神と軍隊教育の精神とは異体同心なり」(第 15 巻第 2 号, 1912 年 1 月 15 日)。

⁶⁶ 平沢耕平「奮闘の実業術の原則と戦術の原則との同一観」(第 15 巻第 5 号, 1912 年 3 月 1 日)。

ず、その方術においても同様である。戦闘の目的は敵を圧倒し自己の目的を達成することにあり、攻撃と防御の戦術がとられ、また指揮官の性能が高く求められると同じように、奮闘の実業精神の目的は凡百の障碍を排除し、有形無形の敵を圧倒し自己の目的を達することにあり、攻勢と守勢によって事業は展開するのであり、実業戦の統帥者の才能は極めて重要である。実業戦はひとつの戦闘であり、軍隊が外国に奮闘して国運を開拓するに等しく、実業的發展を外国に展開していくことを希望する。

なお、言うまでもないことであるが、武士道精神の延長線上にある軍人精神を強調することは、『実業之日本』が日露戦争後の軍拡政策を批判し続けたことと矛盾するものではない。同誌は、軍拡政策が経済の発展を抑圧し、国力をかえって低下させることになると主張したのであって、軍隊そのものを批判したり否定したりしていたわけではないからである。

以上、この時期の『実業之日本』の論調を、いくつかの項目に分けて見てきたが、その全体の総括は、後の「まとめ」にゆずりたい。

第5節 増田義一の政界入りと辞任

増田は、1912年5月の第11回衆議院議員選挙に、郷里の新潟県より国民党候補として出馬する（当時の選挙制度は全県一区制）。そして、衆議院議員に初当選している。以下、次の第四章にまでわたる時期をも含むが、ここで彼の議員生活の様子を見ておこう。

いきなりの増田の政界進出は、やや奇異に感じるが、その心境について、増田自身は「志は即ち国家を以て任し、郷友⁶⁷の厚意に報ゆるを念とするものである」と述べている⁶⁸。増田は自分のめざす政治改革は、政界革新、財政緊縮および実業発展の三つであると宣言する⁶⁹。実業発展については、言うまでもないことであるので、ここでは前二者について、その内容を具体的に見ておこう。

まず、政界の革新については、次のように指摘する。政治は国家興隆の根本であるが、しかし日本の政治の現状は未だ誠実さを欠き不真面目なものである。政府のみならず、議会も政党も、多くは私利あるいは党益を期しているだけで、真に国家に責任をもつ憂国の志士は極めて少ない。たとえば、第二十八議会で議論された鉄道港湾およびその他の地方問題などの提案は、いずれもお土産案であり、議員がそのことを選挙民に誇り、党勢拡張の利器に供しようとしているとしか考えられない。

⁶⁷ 高橋文質のことを指している。

⁶⁸ 「余が現在の政治に対する感想」(第15巻第13号, 1912年6月15日)。

⁶⁹ 前掲・「余が現在の政治に対する感想」。

なかでも鉄道の敷設に関する建議案は、それだけでも 27 線に達するが、いずれも選挙民の歓心を買うためのものであり、現実には議員が私利を図るためのものにすぎない。つまり、空論を述べて地方の民心を蠱惑しようとするものにほかならない。また、同議会を騒がした選挙法の改正問題にしても、党勢拡張の便に利用されたものに過ぎず、人智の進歩、社会の発展に伴うべき選挙権の拡張という本来の意味を度外視したものである。

以上のようなことを指摘した後で、増田は、「余は國務参政の第一着手として国民を挙げての政界の革新」に向かって邁往したいという決意を示したのである。

次に、財政方針についてであるが、ここでも増田は政府を強く批判する。つまり、第一次西園寺内閣は積極政策を標榜したが、国費の緊縮と民力の休養を無視したまま増税を断行して官業を拡張したために、財政にはいささかも好転が見られない。すなわち、同内閣は緊縮主義を唱えながら実際には全く逆のことをしており、議会で宣言した「我財政の信用を厚くして以て将来に於ける国力の発展に資すべき」とは正反対の結果をもたらした。

増田が言うように、その当時は、軍拡のために財政が異常に膨張し、さらにそのために国民の過重な税負担を強いることで、物価の騰貴と生活の困難をもたらし、国民に二重の打撃を与えていたのである。

さらに増田は、具体的な例として織物税の徴収方法、世界大博覧会の延期などを俎上に挙げた。とくに博覧会は日本商品を世界市場に紹介し、国家の発展、国運の隆盛を図るためには極めて良い機会にもかかわらず、第二次西園寺内閣が国費多端を理由にして、この計画を無期延期したことを、一等国の名を辱めたものであるとして鋭く批判した。

また増田は、「政治変動の真相を叙して国民の任務に及ぶ」⁷⁰の中で、立憲政治は大正時代に完成すべき大業であるとして、次のように言う。議会の開設以来 23 年も経っているが、立憲政治が常規を逸し変則を持続したままになっている原因は、長閥の専横跋扈にある。政党はつねに長州閥と妥協して、結果的には長州閥を助長してきた。これを改善するには議員も政党も、従来のような妥協を排斥して政党政治を徹底させなければならない。また、薩派と政友会との連立内閣は、政友会自らが主張する政党内閣と背馳するものであり、閥族打破ではなく、長州閥にかわって薩摩閥を浮かせたに過ぎない。政友会は自ら排斥しようとした妥協政治を再現し、民論を無視する結果となった。そのため、国民はさらに第二・第三の憲政擁護運動をくりひろげねばならない。しかし、それを代議士や政党にのみ一任することはでき

⁷⁰ 増田義一「政局変動の真相を叙して国民の任務に及ぶ」(第 16 巻第 5 号, 1913 年 3 月 1 日)。

ない。憲政擁護は国民の任務であるからである。立憲政治は本来監督政治であり、国民はその代議士を監督しなければならない。国勢の改善や憲政の発達には国民の自覚と努力によるところが大きい。このように、増田は、大正の新時代は固陋なる官僚思想を打破すべきだと明言し、国民が憲政擁護のために積極的に行動することを切望したのである。

ところで、このような決意と使命感をもって議場に登場した増田の活動は、どのようなものであったのであろうか。実は、この点に関して言えば、その実態はあまり分からない。というのは増田のこの時期の議会活動については、残念ながらほとんど記録がないのである。

この時期の増田について知りうる唯一の議会活動は1913年初めの「明治天皇頌徳記念事業二関スル建議案」の提出である。その1年前、実業之日本社は、明治天皇の即位五十周年の明治天皇記念事業を提唱していたが、増田は衆議院議員として、この事業を提案したのである。増田は、犬養毅など41名の賛成を得て衆議院に「明治天皇頌徳記念事業に関する建議」を提出した。そして、それは3月20日の本会議において満場異議なく、ただちに18名の委員附託となった。3月20日の衆議院本会議における演説速記によれば、増田は「明治天皇は不世出の大人格（であり）、千艱万難を排して国家を富嶽の安に置かんとする維新の大精神は、日本国民はこれからもずっと奉戴して無限の向上発展」を図るべきものであるとして、「御聖徳を永久に記念するところの事業」の完成を希望すると述べている⁷¹。

ただ、これ以降の増田の政治活動に関する資料は、ほとんど皆無に近いのである。それは、出版人として増田を評価している文章が数多く残っているのとは対照的である。わずかに梅山糺編『増田義一追懐録』に、徳富蘇峰と鶴見祐輔が増田の政治への関与に関して書いた短い文章があるので、それを引いておこう。

まず、徳富は次のように述べている⁷²。

政治の方面では大隈侯をたすけて、大隈侯が政界の表面にあらうがなかろうが、政治の身上として常に大隈侯をたすけた。増田さんは穏健な進歩主義者であった。もし、増田さんが凡てのものをなげうって政治に専心したならば、とっくに大臣になったであろうが、色々の関係でそれは実現しなかった。然し、信用の厚い有能な人物であったので、私も政治論は抜きにして、選挙の際などは、増田さんのお手伝いをしたこともあった。

⁷¹ 『帝国議会 衆議院議事録索引』3巻（衆議院事務局、1994年）p.99。

⁷² 徳富蘇峰「日本を幸にする人」（梅山糺編『増田義一追懐録』、実業之日本社、1950年）p.193～196。

次に、内務政務次官を務めた鶴見祐輔は次のように述べている⁷³。

雑誌の経営者としての花々しい活動に引替へ、政治家としては、増田さんは比較的地味な途を歩まれた。従て世間では、増田さんの衆議院議員としての業績は、あまり眼立たなかったかも知れない。しかし政党といふものは、かういふ物静かな人徳のある且つ求むるところなき人の存在によって統一せられ、且つ効果的に運営せられてゆくものである。

増田は、のち 1920～30 年代になると、民政党総務、同政務調査会長を務め、さらに衆議院副議長にまでなっている⁷⁴。しかし、それは政治家としての行動力というよりは、その穏健な人柄や敵を作らない調整力が、そうした任に当らせたものと思われる。少なくとも、この時期の増田が、積極的な政治活動をしたという事実はないのである。

それどころか、1914 年 4 月 12 日、増田は早大総長高田早苗とともに新橋駅を出発して、朝鮮・満州を通り、シベリア経由で欧米視察の旅に上ってしまった。二人は、5 月 1 日にはモスクワに到着、次いでドイツに入った。その後は、留学中の大山郁夫が高田総長の秘書格として一行に加わり、それよりイギリス、フランス、イタリアなどを巡り、7 月再びドイツに戻った。同月 21 日にはイエナでオイケンとヘッケルを訪ねて歓談したりしたが、第一次世界大戦勃発の危機が間近に迫ったのを知り、急ぎスイスに逃れ、再びイギリスを経てアメリカに渡ることになった。9 月 28 日にはワシントンで当時の大統領ウィルソンを訪問した。その後 10 月 3 日には、ニューヨークのカーネギーホールで催された日本人会に臨んで講演している。そして、2 日後の 5 日に野口英世と面会した後、西部地方に至って邦人活躍の実情をつぶさに視察した。そして 11 月 17 日横浜港に帰着し、7 か月にわたる外遊を終わった。

ところが、ここに増田を待ち受けていたものは、増田の所属する国民党と大隈内閣との間で繰り広げられた師団増設問題をめぐる正面衝突である。そして党議と恩義の板ばさみとなった彼は、『実業之日本』の同年最終号である第 17 巻第 26 号(1914 年 12 月 15 日)に「政界引退の辞」を掲げて代議士を辞職してしまうのである。翌年の新年号(第 18 巻第 1 号, 1915 年 1 月 1 日)誌上には、彼の「新活動に入るの辞」が載った。そのなかで増田は、欧米諸国の実力が科学的に精練されたものであることを称賛しているが、それに続く日本に対する希望についての最後の部分を引

⁷³ 鶴見祐輔「雲間片鱗」(『増田義一追懐録』) p.184～189。

⁷⁴ 白鳥令監修『激動の日本政治史 明治大正昭和歴代国会議員史録(下)』(阿部書房, 1979 年) p.2204。

用しておこう。

顧みて我国に於ける各社会の状態を見れば彼我の相違頗る甚しきものありを感ず。乃ち余も亦竊に先覚の驥尾に附して、微力を這般の革新に致さんと欲するの念頗る切なるものありき。然るに何の幸ぞ、帰來偶然政界を引退するの已むを得ざるに至り、再び全力を吾人の本務たる社会教育に傾注すべき機運に会す。此に於てか余は欧米視察によりて得たる所を提唱し、微力を揮つて聊か我社会の革新に貢献する所あらんと欲す。⁷⁵

彼は、自分が政界から引退するのは、実業之日本社の発展に全力を尽すためであり、それが自分の本務だからであると述べている。そして、それが社会の革新に貢献することだとも言う。しかし、それは彼の本心であったのであろうか。政治の革新を強く訴えていた増田が、欧米旅行に行っただけで政界を退き、再び本業に戻る意を固くしたというのは、どう見ても不自然である。長らく政界進出の念願を強く抱えてきた増田にとって、本心は決してそれを望んではいなかったのではないだろうか。原因はやはり、大隈との対立を避けるためであったと思われる。

大隈と彼との個人的な根強い関係に関して、元大蔵政務大臣の大口喜六は、『増田義一追憶録』の中で次のように述べている⁷⁶。

ところが、その増田君が、一度大隈内閣が成立し、その二ヶ師団増設の議に国民党が反対するや、曾つての私と処を替へ、大隈に対する恩義と党議の板挟みになって苦しみ、去就を決し兼ねて外遊し、帰朝後つひに衆議院議員をも辞任するに至ってのは面白い成り行きであった。当時私は親しく増田君の心境を叩いてみたら、
「大隈さんの恩誼は別だ。大隈さんにかかるとは、僕はかなはんよ」と笑っていた。その後、私は何処までも犬養氏の下に留まり、つひに畏友増田君とは政治上の立場に於て袂を分つことになったが、親友としての二人の間柄には一生変ることはなかったのである。

増田は後年、「普選で体験した人情観」(第31巻第6号, 1928年3月15日)の中で、この件について述懐している。彼の考える選挙は、一種の人物試験であり、また義理や人情の試金石でもある。そして、義理と人情が衝突するときには、義理よりむしろ人情のほうを大切にしたのだという。この言葉からも彼が代議士を辞職したときの心境が覗かれる。

かくして、増田は一時、政界から離れることになる。この間の増田の在任期間は、

⁷⁵ 増田義一「新活動に入るの辞」(第18巻第1号, 1915年1月1日)。

⁷⁶ 大口喜六「政友にして心友増田君」(『増田義一追憶録』) p.81~85。

約2年半に過ぎず、しかもそのうち7か月は外遊で過ごしている。そのような政治生活しか送らなかった増田に、何らかの政治的成果を期待するのは無理なことである。彼が再び政界に登場するのは、9年後の1924年の第15回総選挙からである。

まとめ

本章の前半では、明治末期から大正初期にかけての実業之日本社の発展ぶりを具体的に跡づけた。第一節では、それを最もよく現している一例として、『少女の友』の発刊とその好評ぶりを見た。また、第二節では、同社が一流出版社として広く国内に認知されていった出来事として、新渡戸稲造の同社編集顧問就任の事情を見た。さらに第三節では、全国小学校児童成績品展覧会の開催、全国各地での講演会、明治記念事業など、同社のさまざまな事業について具体的にとりあげた。これらの過程は、実業之日本社の短期間における成長ぶりを示すものであるが、同社はそれらを通じて、それまで雑誌社の首座にあった博文館に追いつき、一部の雑誌はそれを追い抜くまでに至ったのである。ただし、それらについては、事実を確認するだけにとどめて、ここでは第四節で扱った『実業之日本』この時期の論調の特徴についてまとめておきたい。

日露戦争後の日本は、いわゆる日露戦後経営を積極的に推進した。それは営業税・消費税などの間接税を基軸とする増税、軍備拡張、そして植民地経営を柱としたものである。しかし、各地の商業会議所や同業組合に集まる商工業者たちは、営業税などの撤廃を要求して増税反対の烽火をあげ、その反対運動の輪は全国に広がっていった。

このような時代の流れのなかで、『実業之日本』は率先して増税反対の論調を掲げ、膨張政策を進めようとする政府を強く批判した。また、増税反対の先頭にたつ東京商業会議所に歩調を合わせて、軍備の拡張こそが財政の紊乱や経済の衰耗をもたらすという主張を展開した。創刊以来、商工業者の代弁者としての立場をとってきた『実業之日本』は、この時代においても、その姿勢を一貫して堅持していたのである。このような増税反対と膨張主義的対外政策反対が、この時期の『実業之日本』の論調の基調の大きなひとつであったといえる。

雑誌界のトップに躍り出た『実業之日本』のこうした主張が、社会的に大きな影響を与えたことは疑いないであろう。この意味では、『実業之日本』が大正デモクラシーの思想的な基盤の一翼を担ったとも言えるのであり、もう少し積極的に評価されるべきであろう。

しかしながら、『実業之日本』の論調には、石橋湛山の『東洋経済新報』などとは異なったものがあつた。そして、それがまた、同誌の特徴であり、個性でもある。

創刊期の『実業之日本』が「成功」に力点を置き、それによって雑誌界に確たる位置を占めるようになったことについては前述した。しかし、この時期に至ると、同誌は、「成功」に代わって、「修養」「奮闘」などを提唱するようになった。それについては、以下のようなことが考えられる。

『実業之日本』の読者には、読者が現在ないし将来において雇用される立場の者が少なくないが、彼らの雇用にかかわる価値観は、言うまでもなく学生や学者とは異なっていた。したがって、富と実業を崇拜する『実業之日本』は、雇われる者は雇主に何を奉仕すべきか、何が要求されるかなどに関する記事をしばしばと掲載した。その記事の多くは、実業家へのインタビューに基づいたもので、現実的に説得力をもっていただけ、読者に大きな反響を呼んだ。同誌のなかに描かれている自主独立の精神に富む青年像とは、常に雇主の利益になることを考え、かつその利益を得るために仕事をするような人物であることが多い。

『実業之日本』は、ある一定段階以上の教育にはあまり視点を置かず、教養的教育よりも実用的教育を重視していた。たとえば増田義一は、前述のように、中学を卒業する生徒が進学する場合に、高等学校にするかそれとも専門学校にするかということに対しては、つねに実業学校の方を勧めていたのである。もちろん、そこには、実業の発達を目指している『実業之日本』の方針もあったが、高学歴をとるよりも、若いうちに柔軟に会社の方針や慣例になれることの方がさらに大切であるという考え方が強かった。さらにまた、実業家は学歴が高く理論的知識しかもたない青年よりは、むしろ実用的な知識をもった勤勉な青年を求めているとも指摘している。加えて、高学歴の青年は就職するには年齢が高すぎるとも述べている。これらの提言は、少なくとも当時の日本では、妥当性をもっていただけると言える。というのは、高学歴の青年を雇用できる企業は、当時まだきわめて少数であったし、そうした青年を雇用した企業は、従来の伝統的な徒弟制的慣行に彼らを適応させるのに、少なからざる時間を費やさなければならなかったからである⁷⁷。

この時期の実業之日本社の雑誌や出版物には、能力よりも人柄を強調する記事や著作が、ますます多くみられるようになった⁷⁸。江口岳東『人格の光輝』(1907年)、

⁷⁷ これらの勤め人が身につけるべき価値観について、『実業之日本』に多数見られる。たとえば、「実業家の青年に対する要求」(第6巻第1号、1903年1月1日・第6巻第3号、1903年2月1日の2回にわけて掲載した)、「世は如此青年を要求す」(第6巻第13号、1903年6月15日)、「実業に従事せんとする青年の五大要件」(第7巻第8号、1904年4月1日)、「実用的青年」(第7巻第20号、1904年10月1日)、「立身処世に必要な十大要件」(第7巻第23号、1904年11月15日)、「実業界は如何なる青年を求むる乎」、「自己の紹介に注意せよ」、「秩序的生活の十大効徳」(以上3編は第8巻第12号、1905年6月1日)、「就職要訣」(第8巻第21号、1905年10月10日)などが挙げられる。

⁷⁸ 『実業之日本社百年図書総目録』(実業之日本社、1997年) p.8~10。

芦川忠雄『人格の鍛錬』『交際術修養』（1909年）『実業青年自尊の修養』（波多野鳥峰、1910年）をはじめとして、かなりの数にのぼり、それらの中には、アメリカ人の著作の翻訳もある。

かつて『実業之日本』は、「成功」を説いて人びとの注目を集め、『実業の帝国』と『成功大全』を世に送り出すことによって、実業之日本社は出版社としての地位を確立した。しかし、この時期の『実業之日本』は、「修養」「奮闘」をしばしば説くようになり、わけても「修養」を強く訴えている。それがこの時期の論調の特徴である。特に「同情の勢力」と題した臨時増刊号（第12巻8号、1909年4月15日）を発行してから以後しばらくは、同誌の誌面のほとんどが修養や出世に関する記事で埋められた。

そして、教育家としての新渡戸稲造の編集顧問就任が、こうした同誌の主張に内容の豊かさと格調の高さを与えることになった。それは、実業之日本社の社会的評価をいっそう高めさせるとともに、当時の日本の出版界にあって、さらに確固たる地位を築かせることになったのである。まさに実業之日本社の拡充期である。

『実業之日本』のこのような論調の変化は、すでに産業革命期を過ぎつつあった時期の社会を反映していたものである。以前のようなカオスの時期が過ぎ、「成功」を目標に掲げて努力しても、必ずしもそれがかなえられるとは限らずに、むしろ夢に終わることが多くなりつつあった。自己実現の機会が少なくなったそのような社会においては、若者たちにバラ色の未来に期待を抱かせるよりも、堅実な人生を送るための知識や技術を修得することの重要性を分からせる必要があった。そして、必ずしもかつてのように、「成功」を勝ち取れない者たちに、意識を自己の内面に向けさせた方が現実的であるとも言える。

さらに実業之日本社は、そのような者に対して慰めの言葉をも用意していた。新渡戸稲造の『修養』は、「迷へる者を導き、落胆せる者に勇気を与え、泣ける者の涙を拭ひ、不満者の心を宥むる」ものとし世に送り出すものであると、自ら宣伝しているのである⁷⁹。それは、この時期の日本に、そのようなことを求める青年が、すでに多数存在していたことを示している。

当時の皇太子（のちの大正天皇）は、侍従の本多正復に向かって、『実業之日本』を毎号取り揃えておくように指示したという。これに対して、実業之日本社は「聊か社会教育の事業に向て全力を傾注する所以のものは、一意我國民の品性を改造し、併せて実業を盛にし、以て涓埃の微効を帝国の進運に貢献せんと欲するの微衷に外

⁷⁹ 第14巻第19号、1911年9月1日、掲載の広告。

ならず」と応えて、創刊 12 年で「品性の修養」「人生の奮闘」「健全なる成功」を標榜してきた社の方針に満足の意を表した⁸⁰。これは、この時期の同誌の特徴を象徴的に示す出来事と言えるかもしれない。

⁸⁰ 「雑誌界空前一大光栄に感泣す」(第 12 巻第 7 号, 1909 年 4 月 1 日) p.2~3。